

プロレタリア革命

準備号

1977.11

労働者共産主義委員会
神奈川県委員会

マルクス・レーニン主義に立脚し、プロレタリア階級の単一革命前衛党を建設しよう！

労働者共産主義委員会の総括（その一）

（一）九・一五斗争は、何をわれわれに突きつけているのか？

（二）九・一五斗争後の党内斗争における、労共委神奈川県委員会の斗い

（三）神奈川県委員会の活動総括

（四）臨中派への質問状とわれわれの見解

（五）「毛沢東思想を、ML主義のもっとも先進的を思想である」とおさえる」

ことについて

（六）組織原則について

（七）我々の主観主義を克服しよう！

マルクス・レーニン主義に立脚するため

(2)

(9)

(11)

(10)

(29)

(31)

(3)

(13)

(46)

マルクス・レーニン主義に立脚し、
プロレタリア階級の

単一革命前衛党を建設しよう!!

労共委神奈川県委員会は、一九七五年の九・一五斗争以降の労共委党内斗争を「闘いの旗」(非公開)を武器にして斗って行く中で、日本プロレタリア階級の当面の任務は、マルクス・レーニン主義に立脚し、プロレタリア階級の単一革命前衛党を建設していくことにあると確認しました。

我々は、この間の歩みの中で、マルクス・レーニン主義に立脚することなしには、どのようなプロレタリア革命も勝利できないということを痛感に総括しなければなりませんでした。そして又、どのような立派な革命理論があっても、それを正しく運用しなければ、その国の革命運動の前進は保証できないということを学びました。

我々は、自らがなしてきた革命実践を検証し、思想上・政治上の限界性を克服していかなければなりません。このことは、これまでの日本における革命運動の総括と一体のものとして対象化しなければなりませんし、ロシア革命と中国革命の歴史的経験からマルクス・レーニ

ン主義の普遍的真理を把みとることと結びつけて果さなければなりません。

我々は、この任務に着手するに際して、これまでの労共委活動の総括をまず対象化し、現在の我々の思想上・政治上の立脚点を明らかにするものです。

我々はマルクス・レーニン主義に立脚し、プロレタリア階級の単一革命前衛党を建設するという任務を、数多くの革命的共産主義者とその諸政党の諸君に提起し、共に担っていくことを決意し、ここに宣言しておきたいと思ひます。

労共委第三回、第四回大会路線

についての総括視点

労共委第三回大会は、一九七〇年十二月に開催され、結成大会の「政治テーゼ」と第二回大会の「政治報告」、そして「規約」を「全面的にとらえ返すもの」として、たれ、「世界党組織化」「党の軍事組織化」「指導の中央集権化と責任の地方分散化」「プロレタリア解放斗争の前衛として活動する党への変革」という路線を打ち出した。

そして、翌年六月の第四回大会は、「党組織の中央集権化」と「党・階級二元論批判」を前面に押し出し、「経済主義的、一國主義的傾向と決別し、プロレタリア解放斗争の前衛として活動する中央集権的組織へと変革する」とした第三回大会路線を肯定的に評価したのである。

その後の第五回、第六回大会は、この路線をめぐる党内斗争は殆んど組織されず、第三回、第四回大会で採択された諸決議を継続するものとしての種々の組織実践が展開されたのである。

我々は、九・一五斗争以降の労共委党内斗争で表われてきた右翼日和見主義派との意識的・政治的決別を、この第三回、第四回大会路線に対する思想・政治上の固結がいかなるものであったのかという点に主要な力を注いで検討してきた。

① マルクス・レーニン主義を重視し、反スタ・トロツキズムに道をあけ渡している第三回、第四回大会路線

労共委第三回大会で採択された「情勢と任務に関する決議」は次のように情勢分析を展開している。

「ロシア革命によって証明されたプロレタリア革命の時代としての現代世界は、東欧、中国の革命にもかかわ

らず、ソヴィエトロシアの官僚的変質と一國社会主義論による平和共存路線、コミンテルンの結成とその反動的変質、解散にもつく世界党による世界革命の放棄、戦後階級斗争に対する帝国主義の抑圧、中ソ東欧の軍事的包圍、後進国との反革命同盟の形成によって『社会主義圏』と資本主義世界は、対立的相互補足的関係ともいふべき政治的関係をつくり出した。」と。

この文章が書かれていた時点は、ベトナム・インドシナ人民の民族解放革命戦争が、米帝とかいらい政権に対して斗われていたときであり、中華人民共和国においては、この革命戦争への実際の援助が行われており、文化革命が斗われていたときである。そして、既に、国際共産主義運動をめぐる路線斗争が中国共産党とソ連共産党との間で、一九六三年から六四年にかけて展開されていたのである。

だが、我々は悲しいかなマルクス・レーニン主義文献の解釈にめぐれており、我々の眼の前で斗われている民族解放斗争、革命戦争と、これをめぐる路線斗争に対する評価を確定できずにいたのであった。

我々は、觀念論と形而上学の観点で現代世界を認識していた。即ち「『社会主義圏』と資本主義世界は対立的相互補足的關係」であると。

この情勢分析は、革共同革マル派に代表される反スタ・トロツキズムの観点と酷似しており、「帝國主義とスターリニズムの代理戦争」論と同じ類いの主張である。日本における反スタ・トロツキズムの一つの特徴は、「裏切り史観」に基づくコミンテルン評価であるが故に、コミンテルン解散以降の各國共産党の果たした役割と評価を「スターリン主義であるから世界革命を放棄している」という静止した時点で認識することによって、マルクス主義を修正してしまふのである。

理論上では、一國プロ独を承認するのだが、現実のプロ独国家で行なわれている革命路線、政策などについて深く研究し、分析することもせず、「平和共存路線だから、ソ共も中共もだめである」と一括して評価してしまふ、結局のところ、一國社会主義建設に反対するのである。

このことは、マルクス主義の國家學說を看過しているか、修正しているのかどちらかである。そのため、プロレタリア階級は世界的な存在であるという点にのみ眼を奪われてしまい、資本主義社会から共産主義社会へと到るには相当長期に渡る歴史的段階である社会主義社会が存在するという点を無視するか修正してしまふのである。そして社会主義社会では、依然として、階級と階級矛盾

盾、階級斗争が存在し、社会主義建設の道と資本主義復活の道との斗争が存在する点を看過してしまふのである。マルクス主義の國家學說を承認できないことは、プロレタリア階級独裁に反対することに違がるのであり、無政府主義であつて、共産主義とは相容れないものである。ロシア革命と中國革命とに対する評価は、マルクス・レーニン主義と修正主義との分岐点にも違がるので更に展開しなければならぬ。

レーニンが指導したロシア十月革命は、マルクス主義のかがやかしい実践であつた。帝國主義とプロレタリア革命の時代には、相当多数のプロレタリア階級が存在し、抑圧されている数多くの農民大衆が存在しており、熱心したプロレタリア階級の政党が存在し、自國の革命実践と結びつけてマルクス主義の路線を定めて、プロレタリア階級と貧しい農民を指導して、團結できる勢力を組織して、階級敵に立ち向かう斗争をおし進めるならば、たとえ經濟的に立ち遅れている資本主義國であっても暴力革命によってブルジョア階級独裁を転覆し、プロレタリア階級独裁の社会主義國を打ちたてることが可能であることを示した。

中國革命の経験は、帝國主義とプロレタリア革命の時代において、植民地半植民地國のプロレタリア階級が、

マルクス・レーニン主義の普遍的真理と自國の具體的實踐を結合させ、民主主義革命の指導権をその手にしっかりと握り、さらに人民大衆を指導してこの革命の勝利を獲得すれば、反帝反封建の任務を基本的に實現したのち、社会主義革命の段階へと進むことが可能であることを証明した。

ロシア革命と中國革命の勝利は、暴力革命についてのマルクス主義の理論の偉大な勝利である。

修正主義者たちは口をそろえて、革命的暴力を攻撃し、「平和革命」という誤まった理論を述べたてが、ブルジョア階級は反革命的暴力を使ってプロレタリア階級に立ち向つてくるのである。

革命の中心任務と最高の形態は、武力による政治權力の奪取であり、戦争による問題の解決である。

カウツキー、トロツキー、ブレジネフ等の修正主義者たちがマルクス主義を修正しているその根本は、プロレタリア革命とプロレタリア階級独裁に反対する点にある。そして修正主義者がその依拠するものは「生産力」説である。この誤った理論は、社会変革をもっぱら生産力の発展にのみ理解して、生産關係の生産力発展に対する反作用、上部構造の經濟的土台に対する反作用を全て抹殺し、社会変革が階級社会では激しい階級斗争によって達

成されるという史的唯物論の原則を抹殺する。

國際共産主義運動の歴史が明らかに示しているように、生産關係と生産力、上部構造と經濟的土台の弁証法的統一の観点を堅持するのか、それとも反動的な「生産力」説に立つのか、これがプロレタリア階級の權力奪取の斗争において、マルクス・レーニン主義と修正主義を区別する分岐点である。

この点をめぐって、最初のプロ独國家であつたソ連では、資本主義復活の道を歩むフルシチョフがソ連の國家と黨の大権をのっとり、スターリンの誤りである「階級斗争消滅」論を更に悪用し、「全人民の國家」論等をもつてソ連共産黨を修正主義者の集團としたのである。フルシチョフは、ブルジョア特權階級をして自己の政治的、經濟的權力を占拠させ、次第に國家機構の全てを握り、社會の富全体を支配する官僚独占ブルジョア階級が形成されたのである。

フルシチョフが十一年間權力を握つたのちソ共修正主義内部に分裂が起こり、ブレジネフがフルシチョフに代つてかわつた。

官僚独占ブルジョア階級は、國家權力を利用して、社会主義所有制を資本主義所有制に変え、社会主義經濟を資本主義經濟と國家独占資本主義に変えた。彼らは、ソ

連人民の労働の果実を欲しいまま横領し、利潤をかすめとり、自国の人民を搾取、抑圧すると同時に、侵略と拡張をおこない、帝国主義の世界分割戦に加わり、社会帝国主義政策を執行している。

ソ連共産党が唱えているのは、レーニン主義、社会主義、プロレタリア国際主義だが、やっていることは、帝国主義の口口である。

中国共産党は、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想を党の指導思想としている。毛沢東主席の指導のもとで、中国共産党と中国人民は、文化革命に基本的に勝利し、プロレタリア階級独裁を堅持し社会主義建設を進めるという「革命に力を注ぎ、生産を促す」方針をとっている。毛沢東思想は、マルクス・レーニン主義の普遍的真理と中国革命の具体実践を結びつけることを基本的になしている。

労共委第三回大会の情勢分析は、マルクス主義の国家学説についてあいまいにしている。六三―六四年の中ソ論争を検討していないため、レーニンの平和共存政策とソ連共産党の「平和共存」路線の根本的対立を見落している。社会主義の規定がなされていない。一国社会主義不可能論―世界革命・世界プロ独論を採用している。総体的に言えば、マルクス主義の国家学説について掘

り下げて研究していないため、プロレタリア階級独裁は歴史の必然であることを理解しておらず、資本主義社会から共産主義社会へ到る相当長期に渡る社会主義社会という歴史的段階における階級と階級矛盾、階級斗争の存在について認識できていないのである。弁証法的唯物論、史的唯物論にまったく立脚できていないのである。

◎ 第三回―第四回大会路線は主観主義の誤りに陥ちいつている。

労共委第三回大会は、結成大会の「政治テーゼ」の一回大会の「政治報告」の限界性として次のように述べている。

「この我々が負っていた、そして今、革命的に克服しつつあるサークル主義的な組織活動とは、自らの組織の任務をあらゆる意味で我々が低めていたということである。それは具体的に、世界党の組織化、軍事の組織化、党派斗争―統一戦線の形成、革命的な政治斗争の組織化、経済斗争の組織化などにおいて、不断に我々がそれらに口先きのものとしてきたこと、宣伝、煽動において手工業性から免れえなかったことの総体的根拠が、結成大会の二回大会において採択された「政治テーゼ」「政治報

告」における限界として把え返されたのである」と。

この提起は、具体的には「労共委はプロレタリアートの解放のために闘う党」として位置づけた根拠となっており、「サークル主義を克服するものとして綱領、戦術、規約を全体性として把える」と規定しているものである。この内容は、情勢分析とプロレタリア階級の党の規定などにおいて、マルクス・レーニン主義の根拠、反スター・トロツキズムが表現されているという思想上の限界性をまざるおさえておかねばならない。

だが、この提起のもつ積極的側面は、当時の革命的左翼の多くの諸君が「党建設」を展望しつつも、実践的になされた組織活動においては、プロレタリア階級の普遍的利益よりも目先の党派の利害の優先をはかってしまっているという現実に対する有効な批判として存在していたことである。この意味において、綱領・戦術・規約を統一的なものにとらえ、党・階級二元論を批判したこと的重要性を意義を我々は忘れてはいません。

当時、我々をも含めて、共産同系の党派は、それまでに日本共産党における党内斗争を闘った経験があり、その後の分派斗争の過程で「暴力革命とプロレタリア国際主義」を旗印にして革命的にも共産主義者同盟を創建してきましたが、日本共産党の「一枚岩の団結」論に対す

る正しい批判がなされずに、党・階級二元論を導いてしまっていたことを歴史的に振り返って総括しなければならぬ段階にあったのです。

それゆえに、「サークル主義を克服する」ということをもって、労共委が、自らを党であると宣言することによって、プロレタリア階級の党建設問題を解決したことはならないものだったのです。

労共委においては、統一再建共産同六回大会―七回大会についての全面総括、共産同系諸党派に対する路線論争―路線斗争の提起が問われていたのです。少くとも、組織活動を共にした関西ブンド、中央派グループ、旧マル戦グループの諸君に対して次の点を表明しなければならなかったのです。

それは、共産同七回大会第二日目の旧マル戦グループの欠席は、路線斗争を回避したものであり、組織日和見主義的対応であったということです。

共産同七回大会以降の共産同における激烈な党内斗争、分派斗争は、過渡期世界論、前段階武装蜂起論を掲げた赤軍派、恒常的武装斗争論を掲げた戦旗派を生み出し、更には、叛旗、情況、左派、仏派、烽火派、RG派を生み出すという事態へと進展していったのであり、労共委が他人ごととして片づけてしまうことはできないはずのも

のだったのです。

我々が、世界党組織化・軍事の組織化・革命的な政治斗争の組織化などを主張するには、共産同系諸党派との綱領論争、路線斗争の組織化と一対のものとして提起しなければならなかったのです。

当時、我々は、日共一旧共産同一六回大会共産同の総括を対象化したものの、この核心について、つまり、日本のプロレタリア階級の単一革命前衛党を建設するという自らの果すべき課題をあいまいなものとし、共産同党内斗争、分派斗争を思想上、政治上で評価することがなし切れず、分裂の結果としての共産同諸党派に対する個別的批判を、主観主義的になしたにすぎなかったのです。

そして、大衆的斗いにおける論争は、党派斗争のための党派斗争とでも言うべきものとして組織するというセクト主義に陥込んでいたのであり、労共委の総路線を反映したところの綱領論争、路線斗争は組織化しえていなかったのです。

こうした我々の思想性は、マルクス・レーニン主義の教条的理解に基づく主観主義を表現していたのです。

主観主義は、主観と客観の分裂、認識と実践の分離をその基本的特徴とするもので、観念論的形而上学の思想、

労働者共産主義委員会の総括

(その一)

(一) 九・一五斗争は、何をわれわれに突きつけているのか？

「マルクス・レーニン主義に確固として立脚し、革命的共産主義者とその諸党派の革命的、党的統合を、プロレタリア階級の単一革命前衛党として勝ちとることが、現在当面の、我々の最重要、かつ緊急の課題である。」

(「斗いの旗」三号、七七・四・七)

労共委神奈川県委員会、すでに、われわれの当面の任務を、「プロレタリア階級の単一革命前衛党建設」に従属させていく事を確認しており、ここに公表していくにあたり、まず自らの立場性を明確にしておくためにも、労共委総括を提出しておきたい。

(一) 九・一五斗争は、何をわれわれに突きつけているのか？

九・一五斗争とは、七五年九月十五日のわが革命二戦士による、自衛隊赤羽補給廠十条支処に対する爆弾攻撃

作風であるわけです。そして、我々の場合においても歴史的教訓から導びき出された通り、教条主義と経験主義という表われ方をしました。

主観主義は革命的実践のなかで、必然的に左右への動揺として表われ、右翼日和見主義と「左」翼冒險主義の誤りへと発展するものであり、毛沢東が指摘するように、「教条主義は具体的実践から離れ、経験主義は局部的経験を普遍的真理と誤認するのであって、この二つの日和見主義思想はともにマルクス主義にそむくものである」ことを学ばなければなりません。

このことであり、攻撃直前の暴発事故により、攻撃そのものは失敗に帰している。その結果、戦士の一人石井同志は爆死、また重傷の安島同志は敵権力の捕虜となったのであった。

われわれ労共委神奈川県委員会は、この九・一五斗争が、その後の労共委の内部斗争を規定してきたこと、結果的には、九・一五斗争の総括をめぐって三分解してきている現実を直視するところから出発する。

九・一五斗争の失敗を契機として、多くの指導的同志が一切の任務を放棄し、組織を離脱していつていること、一方で、右翼軍事反対派投降派(現在、怒濤紙を評論紙に改作して発行している。新怒濤派とでもいうべき部分である。)、**「左」翼日和見主義派(臨中派)**が台頭し、組織そのものがこの二者に二極分解していったこと、われわれは、これらすべての偏向と斗ってきたのである。

われわれの九・一五斗争総括は、わが革命烈士石井同志の死を無にしないこと、すべての九・一五斗争の教訓を汲みとる中から一步前進することを目的とする。九・一五斗争時点の労共委の総路線における欠落点、限界性を暴き出し、これを克服して更に前進すること、プロレタリア革命の勝利を手に入れること、これこそが革命的共産主義者の態度であり、石井烈士の遺志を継承する道

である。

さらには、「石井同志の死を無にしない」ことは、官僚主義的に責任をなすりつけあったり、その裏返しとして、個人主義的に責任を背負ってみたりしたり、同志の死を一面的に美化し、ブルジョア的感傷にひたり、組織的敗北に甘んじていることではもとよりない筈である。

しかるに、唯一回の攻撃の失敗、それだけで「組織がもたない」現実、このことは、われわれにとって何を意味していたのか？例えば、労共委がレーニンの中央集権主義を組織思想として復権せしめ得た歴史的貢献があればあるほど、われわれが経験せざるを得なかった、あの九・一五斗争以後の中央委員会の崩壊、頭の吹っつんだ中央集権的組織の混乱とは、何を意味していたのか？

要するに、結果的に九・一五斗争がわれわれに突きつけたものは、労共委の全面的総点検であったのであり、従来の独善的ドグマの上にあぐらをかいたままの姿勢では、もはやわれわれは、一步も先へ進めない、という現実であった。

従来からの労共委への結集が、その純粋な姿においては、個々人の革命への情熱がその契機であればあるほど、革命と組織が背反していかざるを得ない労共委の現実を、われわれは痛苦に直視せざるを得なかった。

共委の現実であった。

軍事について、武装について、われわれはあれこれと語ってきたのであるが、結局は、従来の経済主義路線にこれらを接ぎ木しようとする努力してきたのにすぎず、われわれの実践の指針となるべき軍事路線の確立に対する努力はおざなりにされてきた。と言わねばならない。

いずれにしろ、一般に、九・一五斗争の失敗が組織的敗北に連がる必然性はなく、失敗の現実を冷静に受けとめ、克服することが問われていたのである。一切の革命運動には、失敗や、力及ばずしての一次的敗北等は、一定覚悟してかからなければならぬのであり、そこで問われるのは、直ちに起ち上がり、革命を続けるのか、どうかということだけである。

(二) 九・一五斗争後の党内斗争における 労共委神奈川県委員会の斗い

労共委における九・一五斗争後の経過は、「大弾圧の予測」にもとづいた非公然的党内斗争として進行したものであったが、その結果は、公安時報などに見られる如く、公安には状況を把握されてしまっているとともに、大衆の目からは陰されて事態が進行していったのである。

サークル主義的組織（又はサークル）が、「党一階級一元論」を認識したとたんに「党」に転化するという、このドグマを徹底的に暴くことからわれわれの総括を始めたのも、これらの事情にもとづくものであった。

「九・一五斗争は、ベトナム革命の勝利以後ますます激化するアジア情勢に反革命的に対処するために日本の労働者・人民を排外主義、民族主義的に組織し、日米の共同反革命体制を強化するものである天皇訪米に反対する斗争であり、ブルジョアジーの軍隊としてますます反共的思想を強め、労働者人民への敵対を深め、ブルジョア階級の侵略と抑圧の実際の担い手となっている自衛隊に反対する斗いだったのである。」（安島敏市「抗戦」2号、九・一五斗争救援会通信）

九・一五斗争の主観的意図は、これ以外ではあり得ない。しかし、労共委総体として、九・一五斗争そのものが、その時点において共有できていなかった事こそ問われねばならない。共有化のプロセスにおいて、「位置づけ」等に関する内部斗争が展開されたのであれば、まだ救いがあったであろう。事實は、九・一五斗争の失敗の結果を見てからの、客観主義的、後付けの見解が百花斉放し、党中央の崩壊、そうして分裂していったのが労

われわれは、「左」右の日和見主義者に對する労共委の分裂の危機を前にして、労共委の統一的前進を要求して、斗ったのであるが、結局三分解し、組織的統一はほぼ不可能となつてゐる。

われわれの統一への努力が成果なく現在に至っていることに對する、われわれの総括は、大衆の批判の目から隔離されたところで進行した内部斗争の必然的結果としておさえている。各分派が政治内容を出しあった上での政治・思想面における論争が、この非公開性の中で当初から抑圧・阻害されてきたのである。とんでもない見解でも、労共委という狭い枠内では、一定の具体的力たり得るのであった。このことを排除するためにも、大衆的批判の要素が必要とされるのである。

ここに、われわれの内部機関紙「斗いの旗」より一部転載して、九・一五斗争後の過程におけるわれわれの見解を若干公表しておきます。

- ① Wの統一と革命的飛躍の為に斗い抜こう！
「神奈川県委員会」（「斗いの旗」一五号冒頭、七六・七・七）

五中総教条主義者、五中総多数教条の結集は、まさに

Wの一分派として、Wの規約を私物化し、臨中派切り捨て方針を分裂主義的に固執し、彼らに追隨する部分だけで「新M大会」を強行せんとしている。われわれは、このような「新M大会」路線に断固反対し、Wの統一と革命的飛躍のために全党大会へ向けて斗い抜くものである。

われわれは、五中総M多数派の諸君が、五中総により完全に結着がついたとしている、七五年十二月の中総準備委破産過程にあつては、多木派を支持したことは一度もないことを明らかにしておく。われわれは、Wの現状を、七五年十二月の事態の延長上において、未だ結着をみない状態として把握するとともに、最終的結着は全党大会において以外にはあり得ないものと考ええる。

それ故に、多木同志の「今更さわざ立てても遅い」とするギマン的態度を糾弾するものである。「ベテンにかかったお前らが悪いのだ」とでもいう様な言われ方を、誰れが容認し得るであろうか。理解し得た範囲内でしか行動し得ない限界性はあるにしても、その反面、理解し得るうちに実践に着手する行動力、それをわれわれの長所とも心得ている。われわれは、「遅すぎる」などといった反動的発想とは無縁である。

われわれは、この間、U紙およびその他において、Wの統一と革命的飛躍へ向けた提起を、不十分ながら一定

明らかにしてきている。すでに、われわれ七五年十二月時点における神奈川県委員会傘下のメンバーは、Wの統一と革命的飛躍のために斗い抜くことを意志統一している。

(A) われわれは、六大M文書第1(七五年十二月十二日付)を受け取った十二月十七日において、六大Mの破産を目のあたりにして、しかも臨中派も、調停派(多木派)に対し、当時われわれはこのように規定していた)も、そのどれをも支持し得るものとは認め得ず、しかし当時のわれわれの限界性は、結局消極的に、組織活動の凍結、強いられた分派を確認したにとどまった。それはその後の六大M文書第2(十二月二十日付)を一切評価しないとともに、なおかつ、東京都委員会および神奈川県委員会の一致点である、「六大Mの罷免方針をもって五中総に介入し、事態打破のために新指導部の確立をめざす」方向に転進した。

しかしながら、その時点においてわれわれが漠然としろイメージしていた新指導部の内実とは、われわれの充分性ゆえに明確な方針提起とはなし得なかったのみならず、その結果は、五中総決議において、臨中派との分裂を固定化させる方向性を許してしまったのである。七六年一月から五月までは、このことに関する党内斗争の

一過程であり、五中総Mのもとで、その枠内で斗った時期である。

(B) 七五年十二月当時われわれの内部では、中央委員会総会によるMの罷免と新指導部選出の一般化が、Wの大会の意義を空洞化させてしまふ危うについて語られていた。しかし、Mが破産している中央集権体制の異常性、事態打破の緊急性、弾圧に対する反撃の緊急性に關する認識は、規約からの逸脱を一定容認してでも、暫定指導部の成立のために斗う必要性を確認せざるを得なかった。

われわれは、五中総がWの規約を利用し、諸手続をふむことにより正統派を名乗ったにもかかわらず、規約上組織思想上において数々の逸脱をなしていることをここに指摘しておく。それは、異常事態時にあつては、実践の緊急性は、Wの規約を、未だ充分に仕上げられていないが故に相対化させること、それ以外では事態に対処することが不可能な場合があること、それだけにその実践の正当性は、その政治内容によってしか評価できないことを示すためである。

まず第一に、五中総は、中央委員会総会が大会になりかわってM員の交代を行なうことに関して、何ら付帯決議を行なわず六大Mを罷免し、Mの補充でなくして新指導部を選出しているが、これは「規約の精神を踏みにじ

る」ものである。まさにこの付帯決議により、暫定Mとしての限定条件が明文化されるはずであった。

第二に、五中総は、定足数の員数あわせに細則第八項を利用して、この細則は、七五・八・二四に発効したものであり、未だ大会で確認されていない相対的な規定である。ここに相対的であるとは、その適用内容、対象、目的により、妥当であるか否かが判断される、という意味である。(注一規約第十五条……細則は大会で確認されなければならない。)

また細則第八項は、「会員を基本組織の定足数から除外する措置について」規定しており、「基本組織会議の定足数から除外することが出来る」場合について規定しているのだが(「」内は、いづれも細則第八項)、規約第四条には、「Wの基本組織は、中央委員会、直属委員会、地区委員会、細胞である」と規定されており、大会及び中央委員会総会は規約上の基本組織にも、基本組織会議にも該当しないものである。

五中総による、細則八項を利用した、その拡大解釈による定足数のデッチ上げ、員数のツッパ合わせは、前述の「相対的」なる概念すら逸脱した反動的なものである。

第三点目としては、M員代理だけで構成された五中総

其には、M員候補以外の中総参加資格者（地区委員長）がM員代理として選出されていることである。しかも有資格者のA同志を除外して。

規約第四条

(ハ) 中央委員会に任務の遂行上支障がきたした場合、

中央委員候補から、中央委員と同じ権限をもつ中央

委員代理を任命することができる。

ところで、この規定は、主語が省かれており、どこで、又は誰れが任命することができるのかが明白でなく、今回のように拡大解釈として悪用されかねない規定であった。このような重要なことは、主語と方法が明確に規定されていなければならないことである。

以上、五中総M登場に関して、規約上の違法性、暫定的にすぎない根拠の一部を検討してきた。しかし五中総Mにあっては、暫定的であるという現実、Wを反爆取戦線に切りこめざる口実とされたのみであり、一方でその政治内容と自称されてきたものは、手続問題にのみ切りこめられた「三大以後の組織観の防衛」であり、その内実は、臨中派切り捨て方針であった。

(O) 「規約のそん守」を唯一の党派性とする五中総M多数派の諸君は、「暫定的」であるという限定条件を多木派のセクト主義的利害貫徹のために逸脱し、まさに独

小な「新M大会」にたどりつかざるを得ない現在の方針からの革命的転換がなされない限り、われわれは、Wの唯一の中央として承認し続けていることはできない。

(D) われわれは、現在現実に存在するすべての相異なる意見を全党に公開し、その止揚を党内斗争の全党的結着に求め、全党員の積極的参加を求めて、党内斗争のための機関紙を創刊する。すでにU紙は二種頒布発行されており、もちろんその相互の交流はなく（五中総M多数派により阻害されている）、結果としては、各分派の機関紙として私物化されている。われわれは、われわれの創刊する党内斗争紙（「闘いの旗」）を、われわれの方針であるWの統一と革命的飛躍のための武器として、全党的公開論争の場として提起する。

すでに臨中派は、「統一に対する態度」を表明し、「政治的・思想的統一」へ向けた総括論争を提起しており、Wの総路線の明確化のために、先行的に全面総括の作業に着手している。

一時的勝利におこれる者に対して、敗北した者こそまさに学ぶ者である。われわれは、現在のには、臨中派の諸君との総括論争こそ実りあるものと確信している。

われわれは、五中総M多数派の諸君が、六大Mのいい面も、悪い面も継承するのだ、などと居直り、未だにひ

害的に「新M大会」を強行せんとしている。彼らにあっては、七六年九月までには第七回大会を行なうことが規約上必要であるという点を主張してくるであろうが、「新M大会」とは、規約上の大会とは似て非なるものである。

Wの一派として、多木派の手にWの規約を私物化し、その悪用のもとで強行せんとしている「新M大会」は、多木派によるWの私物化の一過程にすぎない。われわれは、このような策動に手を借すことはできない。

実際はたして、五中総M多数派の諸君は、現在でも全党的多数派で有り得るなどと考えているのであろうか。否である。それ故にこそ、これほどまでにWの否定的現実を悪用し、分裂主義的多数派工作にのみ専念しているのである。Mの権威にもたれて、横柄に、他派に対して分裂主義の、解党主義のとレッテル貼りを続けているが、これらはみな、自己の組織日和見主義、分裂主義を陰ベイするための術策にすぎないのである。

Wの統一と革命的飛躍へ向けたわれわれの闘いをワイ曲し、おしとどめることにのみ専念してきた（われわれの意見書U文書に対するMコメントなるものをみよ！）五中総Mを、暫定的にしるわれわれは、もはやこれ以上肯定するわけにはいかない。五中総Mの現在の方針、歪

た陰しにしている彼らの政治内容を相互批判の場に引きずり出すためにも、六大M主要文書の検討と総括を出していく。すべての同志の積極的意見表明を要請します。

(三) 神奈川県委員会活動総括

「斗争の旗」三号 (一九七七・四・七)

〔はじめに〕

我々は、七六年五月以降、労共委活動の総括作業を射定にしつつ、労共委における一定の党内斗争、党内論争を組織してきている。

この歩みの中で、労共委の政治・思想上の立脚点が何であったのか、労共委の組織実践はプロレタリア階級の政治にどのように奉仕してきたのか、我々は社会発展史をどのように認識してプロレタリア革命を担っていくのか、などについて検討してきている。

こうした検討を経て、これまでの労共委は、マルクス・レーニン主義に立脚することをあいまいにして、組織実践を展開していたこと、構成員個人のプロレタリア革命に対する決意性や情熱などの側面にのみ依拠する傾向が強かったこと、「経済主義、サークル主義からの決別」を打ち出していたにもかかわらず、弁証法的唯物論と史

的唯物論というプロレタリア階級の世界観、方法論を身につけてこれなかったことなどを、我々は認識してきている。

マルクス主義の史的唯物論は、人類社会はそれ自身の矛盾の運動により、法則に従って低い段階から高い段階へと発展するものであることを科学的に解明している。この社会発展史、つまり、人類社会は原始社会、封建社会、資本主義社会を経て、最後には必ず社会主義社会、そして共産主義社会へと到達すること、を理解しなければならぬ。

プロレタリア階級の独裁の歴史的必然性とその意識を、我々は確固として認識しなければならない。

弁証法的唯物論と史的唯物論は、プロレタリア階級が広範な革命的人民とともに、科学的に世界を認識し、革命的に世界を改造する上での強力な思想的武器であることを、我々は幾度も確認しなければならない。

我々は、労共委活動を総括していくに際して、労共委第五回大会中央委の下に組織された神奈川県委の活動総括を対象化する。

〔神奈川県委の組織化について〕

神奈川県委は、七二年夏に組織された。それまで、労共委の神奈川県下における政治活動の展開は、六八年から七十年にかけて斗われた全共斗、反戦青年委運動を担った共学戦の組織化、関東学院大斗争の組織化などとして行なわれていた。

だが、全共斗、反戦青年委運動が、高揚期から退潮期へと向っていく中で、労共委が第三回大会で打ち出した共学戦運動総括は、それまでの共学戦運動の高揚に水をさすようなものとして展望の期待できない方針であったがゆえ、労共委の第三回大会、第四回大会路線に基づき、「共学戦メンバーを労共委へ獲得する」方針とは裏腹に、運動に関わってきた学生、青年労働者は具体的展望を見失ってしまうという混乱がもたらされていたのである。こうした事態は、それまで労共委メンバーとして積極的に活動してきた人にも反映しており、多くの革命的部分が活動から遠ざかってしまう結果となり、又、組織的活動に対して否定的見解をもつようになった人も散在するようになっていた。

このため、比較的に活発な大衆運動が展開された関東学院大以外には、県下における労共委の政治活動の展開は殆んど存在できなかったわけである。

それまでの労共委活動がもたらせた否定的事態を背負

いながらも、これを打開せんがため、神奈川県委は、組織された段階において、県下における労共委活動の拠点形成することと第一とし、神奈川県委と基本組織を行動的組織として創りあげていくことを第二の目標として出発したのである。

この二つの方針は、先にのべた大衆運動の退潮期を認識したものとして打ち出され、労共委の宣伝、煽動活動を系統的に行なっていくことを重視したものである。だが、第五回大会時点の労共委は、大衆工作に組織活動の多くをあてる方針をとっていたため、労共委全体の系統的、計画的方針として意識化していたとは言えない側面が存在していたのであり、この点に留意しておかなければならない。

〔神奈川県委の組織実践について（七二年七月～七四年秋）〕

神奈川県委は、県下に於ける労共委活動の拠点を形成し、県委と基本組織を行動的組織として創り上げていくという方針の下に、具体的戦術を次のように設定した。

第一に、怒濤読者の拡大、第二に、地区情宣紙の発行第三に、労共委メンバーの獲得である。

このことは、怒濤読者の拡大については、個人的活動の域を出ていなかったことを否定的に総括し、基本組織の活動計画に組み入れて怒濤を配布すること、地区情宣紙の発行により京浜地区の労働者人民に対する系統的な宣伝、煽動を増大し、革命運動への広汎な参画を促していくこと、これを通して、県委と基本組織が積極的な行動を組織化することを目標としたのであった。

怒濤読者は徐々に増加し約百部は確実に配布され、情宣紙の配布や集会の際にも、販売する方針を採用し効果的に行なわれるようになっていた。情宣紙は、定期発行体制をとることに成功し、千二百部発行できるようになった。情宣紙発行体制は、任務分担のもとで計画性を殆んど崩すことなく築かれつつあった。メンバー獲得については、加入者の大半が大量運動を経験した人であった。

こうして、県委の当初の方針は、組織化されてから約一年半後の七三年十二月までの中では、基本的に成功裡のうちになされてきた。では、この時点までの県委の組織実践の意義と評価について述べてみることにする。

意義の第一は、県委と基本組織を行動的組織として創りあげていく方針との関係において、系統のかつ計画的な宣伝、煽動活動を定期的に行なうことによって、行動

的組織化の動きは殆んどと言っていいほどなされておらずにいた。

第二の克服すべき側面は、第一のことと関連しつつ、表面化してきていた小集団主義、つまり、セクト主義の傾向である。

セクト主義の傾向は、労共委の大量工作の数々の場面で顕在化していたのであって、看過することのできないものである。

その代表的な例は、労共委の八・二五共斗への関わりにおいて表面化したものである。

当時、労共委は「党と大衆組織の区別と連関」という主張を行ない、八・二五共斗に問われていた具体的活動方針と獲得目標を提案するでもなく、ただただ「大衆組織の自発性」にのみ期待することによって、八・二五共斗に対する党的領導性を見失っていた。

当時の赤軍派やマル青同の諸君は、党建設の重要性と緊急性を党派性の強いものであれ、提起していたのであるが、我々労共委は、七・七連絡協へと大衆を「困い込む」ための説教を対置したのであった。

この我々の態度は、プロレタリア階級の政治的闘いを不断に実践し、検証し、発展させていくという態度をとるのではなく、自らの組織化した大衆的組織にのみ、大

性のある活動スタイルが定着し、宣伝、煽動活動の果す役割と意義を理解できるようになったことである。第二は、キャンプを中軸として組織活動を展開していくことの重要性を實踐上において理解したこと、組織活動への積極的な関わりを芽ばえさせたことである。第三は、県委では日常的な指導性の発揚が問われ、執筆、原稿検討などの作業も政治的訓練として意識されるようになったことである。

他方、克服しなければならぬ側面は何であったのだろうか。

第一は思想・政治上の団結がおろそかにされていたことである。行動性のある活動スタイルを定着せんとする一方で、大量工作が多忙をきわめていたことに規定され、活動スケジュール調整が難しくなり、学習活動が組織的に取り扱われなかったり、組織実践の総括における思想・政治上の点がおろそかにされたりしていたのである。

こうした否定的事態は、マルクス・レーニン主義の学習と階級斗争を統一的に取り扱うものではなく、経験主義や教条主義を生み出す主観主義の誤りに通じるものである。このことと関連して、労共委第五回大会は、綱領獲得を早期に成しとげる方針を決議したにもかかわらず、労共委全体の組織実践における綱領獲得にかかわる具体

衆を「困い込む」ことに力を注いだものである。

広範なプロレタリア階級と勤労人民が参加している大衆的闘いを発展させるべく領導し、不断に共産主義思想を宣伝し、革命事業へと決起させていく上で、問われる問題は、マルクス・レーニン主義を武器とした総路線の提起と政策、具体的戦術を提出することなのである。これを保証した上で、プロレタリア革命を共に担うための工作を行うものでなければ、小集団主義に陥ち込むものなのである。

革命的共産主義者の団結の提起は、その結成すべきプロレタリア政党的思想、政治を第一としてなされるべきであることは言うをまたない。ここで、綱領的見解をめぐる斗争、路線をめぐる斗争が必然化するものであり、これをいかにして有効な党派斗争として展開せしめ、これへ広範なプロレタリア人民を組織していくのが問われるのである。

第三の克服すべき否定的側面は、共産主義と労働運動の結合という観点が認識されていなかったことである。

労共委は、第三回、第四回大会で「経済主義、一國主義からの決別」を宣言したのであるが、採択された諸決議において、労働運動についての労共委が関わった活動の総括は見当たらないのである。にもかかわらず、労働運

動に動いていたメンバーが形而上学的で、しかも是れだけの糾弾と批判にさらされるといふ事態が存在していた。

このことが少なからず起因して、第四回大会後に、大量のメンバーが組織活動から離れていった。

この否定的事態は、これを招いた根拠の大部分は、労共委の思想上の限界性によるものである。事実、東京部品工業での闘いや、反戦青年委運動の総括は提起されておらず、共産主義と労働運動の結合については一言半句も主張されていなかったのである。

現在、日本労働運動は、J・O・同盟・民同などの帝国主義的労働運動によって占拠されているが、他方、民間中小企業組合などの戦闘性を有した闘いが、金金本山、南大阪などを筆頭に激烈に闘われている。

帝国主義、社会帝国主義による覇権をもとめた世界市場分割戦は、植民地国・半植民地国の労働者、貧農を中心とした民族解放斗争によって迎え打たれている。

ベトナム・ラオス・カンボジア三国人民は民族解放斗争の勝利的前進の中で、社会主義建設へと進む継続的闘いの段階を迎えており、反帝・反シオニズム・反イスラエルのパレスチナ・アラブ人民の斗争も激烈に展開されており、アフリカ人民の反帝・反人種主義・民族解放の

争いも前進している。

帝国主義国の労働者階級と勤労人民は、自国の侵略、他民族抑圧に断固反対し、民族排外主義に反対し、帝国主義と社会帝国主義の覇権主義に反対し、アジア・アフリカ・アラブ・ラテンアメリカ人民の解放斗争に連帯して、自国の帝国主義を打倒しなければならない。

そして、国際共産主義運動のその内部に存在している修正主義と闘い、社会帝国主義のソ連共産党に断乎たる攻撃を行なわなければならない。

我々は、プロレタリア階級の解放斗争の勝利は、プロレタリア階級自らが政党を組織し、国籍や民族にとらわれないプロレタリア国際主義を体现すべく、マルクス・レーニン主義で確固とした思想的武装を果して、生まずたゆまず闘い続けることによって、はじめて獲得できることを肝に銘じておかねばならない。

共産主義と労働運動の結合という観点を常に堅持しておかねばならないのである。

〔神奈川県委の組織実践における小集団主義〕

一九七三年の県委活動は、七二年七月からの活動を一定収納する形で展開された。

大衆的闘いで決起した青年労働者、学生の組織化と、県下での大衆的闘いの領導性を獲得することが目標とされ、一方、行動性ある委員会組織をより強固なものとすることが問われていた。

こうした中で県委は、七三年ミッドウェイ横須賀母港化阻止斗争への取り組みを決定し、神奈川県下の労働者学生の大衆組織化に、成功した。しかし、思想、政治上の全面性を保証することができなかった。

翌七四年、戸村一作氏の参院選斗争においては、「連帯する会」へと広範な労働者、学生を参加すべく工作し県下の大衆的闘いの結合を一定程度促進することができたが、それは、ミッドウェイ斗争の質と量を引き継いだものではなく、ゼロからはじめたものであった。

ミッドウェイ斗争の第一歩からの大衆的組織化の活動は、関東学院大での組織化、市民団体への呼びかけ、県下でのピラミッドから開始し、横須賀現地集会を中軸として組織化していくことに一定成功した段階において、全国的規模での組織化を準備せしめていくことを目標として活動に入っていた。

ミッドウェイ斗争は、神奈川ベトナム革命連帯共斗会議を中軸とした現地集会で約二百名を結集し、全国規模

の集会では、八・二五共斗傘下の大衆団体を殆んど結集した中で約八百名の動員をかちとり、革共同草マル派の妨害をはねのけて闘われた。

だが、ミッドウェイ斗争の成果をめぐって、神奈川ベトナム革命連帯共斗会議の内部における意見対立（主要には十・二一集会での代表発言問題）を正しく解決することに失敗し、関学大ベ共斗との暴力的党派斗争を招いてしまい、神奈川ベトナム革命連帯共斗会議の分裂・解散に結果した。

県委が意図していた神奈川ベトナム革命連帯共斗会議を中軸とした県下における大衆運動の高揚をなし、革命運動へと広範な労働者人民を決起させるといふ方針は、不可能なものとなってしまったのである。

その後の県委における総括では、労共委メンバーが、この過程で増員したことをもって「大衆運動の高揚期にはつきものの党派斗争であったので止むを得ない」的におさえられたのであるが、こうした総括は、後になって鮮明に表現された党派斗争至上主義とでも言うべき、小集団主義の根拠になっているものである。

〔神奈川県委の思想、政治上の立場点〕

七四年冬の労共委第六回大会を前にして、県委は、労共委活動における種々の否定的側面について総括せんがため、第六回大会において決議すべき点についての提起を行なったのである。(U二十六号)

この県委の提起は、第五回大会後、二年間経過した時点において、第五回大会で確認されていた「第五回大会綱領獲得作業を全党でなす」活動が、いっこうに進展せず、むしろ、あいまいにされていること、他方、七四年四月・六月の大衆運動を通して表現された労共委活動の不統一性などの否定的事態について危殆を認識したことに基づき提起したものである。

この県委の提起は、「日和見主義との分岐を鮮明にしよう。中央集権的組織活動を強化しよう。六回大会を契機に委員会否定的傾向を払拭しよう。」を主題としてなされた。

この県委の提起は、第六回大会において中央委員会提出原案に対する毛利・小山対案の骨格となったものであり、第六回大会後、第六回大会中央委より提出された「組織活動に関する手引」(非公開)へと引き継がれる内容をもっていたのであり、これへの検討は、労共委全体

の思想、政治上の立場点を総括する上で重要な意義のあるものと判断する。

労共委第六回大会は、中央委提出原案「活動方向に関する決議」、毛利・小山対案、原案の修正案(都委員会グループ)のどれをも否決した。この過程において、大会は、原案と対策との相異点を鮮明にして、徹底して討議することなく運営されていた。

どれもが否決されるや、原案を提出した泉・早川同志は、対案提出メンバーをとり込む方針とも言える原案・対案の折衷提案を行なった。大会議長団は、大会日程が残されていないことを理由として、徹底した討議を組織することなく泉・早川折衷提案を採決に付し、これは僅かの差で可決されたのである。

それまで共同歩調をとっていた神奈川地区の大会出席者は、この折衷提案によつては、労共委内に存在している主要矛盾は解決されえないと漠然とではあれ感じとっていたのであったが、結局、泉・早川折衷提案は可決し、中央委の構成は、対案提起者、修正案提起者を加えてなされたのである。

こうして第六回大会は、対立物の統一という唯物弁証法の観点に基づいて運営されることなく、労共委内の主要矛盾を対象化させることなく閉会したのである。

労共委のこれまでの大会が、そうであったように、第六回大会もまた、形而上学的な矛盾と対立のとりえかた

に支配され、党内論争・党内斗争を組織化できずに終わったのである。そのため、大会における議題の取り扱い思想、政治を第一とした団結に注がれず、観念論と形而上学的観点で、綱領、規約、戦術上の諸方針が取り扱われ、このことに根拠をもって、大会を頂点とした組織実践は軽視される傾向が主流を占めてしまったのである。

我々は次のことを深く認識しなければならぬ。

理論と実践の統一は、マルクス主義認識論の根本原則であり、マルクス主義の革命的学風であること。

実践は人類の認識の源泉であり、認識が發展することの基礎であり、社会的実践の發展にともない、人々の認識は、低い段階から高い段階へ、一面的なものから多面的なものへ、静止的なものから運動的なものへと、たえず發展すること。

理論とは、概念、観点の体系であり、人々が感性的材料を整理・改造して到達した思考の結果である。科学的な理論は、社会的実践を基礎にして生まれ、また社会実践を通して検証され、証明される理論であり、客観的事物の本質とその法則を正しく反映したものである。科学的な理論は、誤った理論とのたえずない斗争の中で發展

するものである。

そして科学的理論は、それが行動を指導することができるところに意義がある。

労共委が陥ち込んでいた観念論と形而上学的観点は、改造する対象である。観念論と形而上学的観点は、プロレタリア階級の世界観と相容れないものである。

プロレタリア階級の世界観は唯物弁証法であり、歴史観は史的唯物論でなければならぬ。そして科学的共産主義の理論は、プロレタリア階級の社会実践である階級斗争の指針でなければならぬ。

我々は、これまで主観が客観を決定するとし、客観が真理を示すことを否定するという観念論の観点が支配的であったことを否定的に総括しなければならぬ。

我々は、労共委における理論と実践の分離、主観と客観の分離という点において観念論と機械的唯物論に占拠され、「左」右の日和見主義への動揺を繰り返していたことを痛感に総括しなければならぬ。

〔県委の提起した「日和見主義との分岐を鮮明にしよう。中央集権的組織活動を強化しよう。六回大会を契機に委員会活動の否定的傾向を払拭しよう。」の評価について〕

第六回大会をめぐる労共委の当時の状態と第六回大会後に表われた事態を理解した上で県委の提起を検討しなければならぬ。

それは、自らも担っていた県委の提起について、執筆された当時の労共委の現状を念頭に置くこともなく、「思想的には主観主義、政治的には小ブル急進主義、組織的には官僚主義」ということをもって、歴史性を捨象し、経験を教訓化することなく、いとも簡単に自己がなした活動実践を放り出してしまった米田同志の思想的乗り移りが存在しているからでもある。

米田同志の「県委総括」案は、県委活動の積極面、否定面を一諸くたにして断罪し、教訓を放り出してあり、思想の全面性を獲得せんとする我々の総括作業への精算的関わりを如実に示しているものである。

県委の提起は、「今こそ、委員会の組織活動の大胆な前進」として、「日和見主義との分岐を鮮明にしよう。中央集権的組織活動を強化しよう。六回大会を契機に委員会の否定的傾向を払拭しよう。」を、第六回大会で労共委が決議すべきであるとしたのである。

そして「三回大会以降、わが委員会が確認して、変革に着手してきた事の基本的正しさを再確認すればするほど、わが委員会は、破産し解体していく小ブル観念論者

共との相異点を明確にし、組織活動の大巾な前進を実現しなければならぬ。」として、第三回大会後の労共委の組織実践を総括提起した。

そして、労共委の否定的傾向として、「中央集権制、任務分担のあいまい性」「対外活動方針の観念性」「党派斗争における日和見主義」「戦斗的行動に対する消極性」をあげ、「これらの点について、実践的な変革をなしうるか否かが、委員会の組織活動の飛躍的前進のための試金石であり、三回大会以降の委員会の確認点を考え方にとどめてしまいかどうかの鍵である」と主張したのである。

こうした総括視点に基づいて、労共委のとるべき方針について、主要矛盾は組織実践上の日和見主義と、中央集権制、任務分担のあいまい性として認識された。

それでは、こうした認識がどうであったのか分析してみよう。

「中央集権的組織活動の強化」として主張された内容は、次のようなものである。

「中央集権制とは、分業、任務分担と不可分のものであり、委員会活動における様々な要請に対して個々バラバラに対応して、委員会内の軋れき、矛盾、手工業性に陥いることを避けるために、下級組織の上級組織に対す

る従属、上級組織の力量の保証をもって、最も有効に組織的に解決することである」というものである。

労共委では、第二回大会四全委の提起である「綱領による結合と規約による民主集中、中央集権制」の限界を克服するものとして、第四回大会では、「中央集権的組織とその活動を、手工業的活動を克服し、プロレタリア民主主義（指導の集中と責任の分散）を通じて、徹底的に強化していくことの意志一致がなされ」てきている。

その意味で、「中央集権的組織活動の強化」というものは、第四回大会決議の内容を再確認することを主張したのである。

我々は、この間の党内斗争で主張した「唯物弁証法により党内生活を指導する」「斗争によって党内の意見の相違を克服することは党発展の法則」という思想性が、労共委に欠落していたことを重視するものである。

第六回大会を前にした県委の提起は、基準なきスターリン批判の中で、トロツキズム、または修正主義的偏向により忘れ去られようとしていたロシア社会民主労働党第二回大会で強調され、物質化された中央集権主義の思想を復権させた労共委第四回大会決議を再確認するものとなっており、この点についての意義を忘れてはならぬ。

だが、問題なのは、中央集権主義一般にあったのではなく、労共委の中央集権制にこそ問題があったのである。労共委第六回大会で示されたように、労共委にあっては、中央集権制は折衷主義を生み出し、これを正当化するものとして機能してきた観があり、政治的あいまいさの温床として機能していたのである。

我々は、プロレタリア階級が自らを独自の政党に組織して、ブルジョア階級の打倒、プロレタリア階級の独裁権力の樹立を当面の目的とし、これを通して共産主義社会の実現を戦い取っていく上での組織実践を、不断に総括し、検証していく立場をとるものである。

こうしたプロレタリア階級の階級斗争において問われる最も基本的なものは、マルクス・レーニン主義の世界観である唯物弁証法と歴史観である史的唯物論に立脚することである。

まさに、プロレタリア階級にとって現実の行動の指針となり、この世界にあらわれる事物に対する認識の方法であり、プロレタリア階級が自らを解放する革命斗争における思想的武器であるマルクス・レーニン主義の哲学に立脚することこそ肝要なものである。

第六回大会を前にしていた頃の神奈川県委員会は、「プロレタリア階級の党は労共委であり、労共委の利益はプ

「プロレタリア階級の利益につながる」とする主観主義におち入っていたことに規定され、日本革命を闘っている数多くの党派に対する評価を、小ブルジョア的党派であるから解体の対象とするというセクト主義の色濃い主張を行ない、実践していたのである。

そのため、革命的左翼の団結に力を注ぐことができず、党派斗争至上主義とでも言うべき傾向を生み出していたのであった。

残念なことに、いまだ日本にはプロレタリア階級の党は組織化されていないと、我々は認識している。

どのような迂余曲折があろうとも、日本革命運動の総括に立って、マルクス・レーニン主義の単一革命前衛党を建設しなければならないのである。

「中央集権的組織活動の強化」という主張は、そうしたことを実践していくプロレタリア階級の思想、政治上の団結について立ち返って提起されなければならないからなのである。

プロレタリア階級の不団結状態を揚棄して斗争には、プロレタリア階級の社会的実践である階級斗争の経験を教訓化し、社会的実践をマルクス・レーニン主義に照らして、不断に検証していかなければならないのである。

こうした意味において、県委の提起は、限界性あるも

のとして提起されていたのである。

「組織活動の否定的側面」として示されたことについて言えば、階級斗争の反映が表われているのであるから、このことから如何なる教訓を捉え取るのか、そして更なる階級実践の前進へと生かさなければならぬのである。米田同志のように、いとも簡単に「破産した」とか「清算した」とか言うことでは、唯物弁証法の見地にのった立場とはいえない。

「統一性と系統性を保証する」ものは、組織面だけとしてはないのであり、肝要なことは、思想、政治が第一であることである。労共委で培われてきた内容で表現すれば、綱領・規約・戦術上の一致という観点めきには語れないのである。

思想、政治をあいまいにして、組織面だけが総括されても、これから導き出される方針は、それこそ、統一性も系統性も保証されない経験が生み出されるものとなり、唯物弁証法と史的唯物論にのっとる成果は期待できないのである。

「対外活動方針の観念性」「党派斗争における日和見主義」「戦術的行動に対する消極性」として主張されたことについて分析してみよう。

四・一四バレスチナ連帯集会や、五・三〇戸村一作氏

と連帯する集会などで生じた労共委の行動上、主張上の差異が存在した。だが、このことは、労共委の政治上のあいまいさにその根拠がある。

それは、世界党建設の主張、ブンド総括、労共委の統一戦線論などに關わる根本的な政治上の総括が物質化されていないことにある。そして、又、第五回大会中央委の主要な活動とされていたはずの綱領獲得のための活動のサボタージュにも規定されていた。

まさに、主要な矛盾は、思想、政治上の団結があいまいにされてきていた点にあり、副次的な矛盾として、「対外活動方針の観念性」「党派斗争における日和見主義」「統一性と系統性」などが存在していたのである。

党派斗争や戦術的行動についての認識上の違いが、神奈川県委とその他の部分において存在していたことは、思想・政治上の団結をあいまいにし、マルクス・レーニン主義の学習が軽視されている中では、いちは必然的なことであった。認識上の違いは、行動上の違いとなって表われ、組織活動に反映するのである。

当時の県委は、労共委の主要な矛盾が何であるのかを理解できなかったのである。

「どんな過程を研究するにも、それが二つ以上の矛盾

の存在する複雑な過程であるならば、全力をあげてその主要な矛盾を見い出さなければならない。この主要な矛盾をつかめば、全ての問題は容易に解決され、この方法がわからなければ、人は五里霧中におちいり、核心がみつからず、したがって矛盾を解決する方法もみつからなく」
(毛沢東『矛盾論』)
「だが、主要な矛盾を軽視すべきではない。事物の諸矛盾は、連関しあい、制約しあい、作用しあっている。主要な矛盾は、主要でない矛盾に主導的、決定的な作用をするが、主要でない矛盾も、主要な矛盾の発展と解決に一定の影響をおよぼす。だから、主要な矛盾を解決するには、主要でない矛盾の解決にも意をもちい、主要なものとの副次的なものとを結びつけなければならないのである」
(同)

県委の提起は、県委が組織化されてから約二年間の神奈川県地区活動の基盤に立って提起されたのであるが、思想・政治上の総括を対象化できなかったものであり、もっぱら、組織上の総括を対象化していたことにより、労共委全体の矛盾を克服していく正しい方針を導き出せていなかった。

我々は、マルクス・レーニン主義に立脚することから

出発して、労共委活動の総括を更に深め、プロレタリア階級の団結を求めて、前進していかなばならない。

〔第六回大会の下での神奈川県委の活動〕

第六回大会後、県委は、第六回大会で、折衷提案可決にもとづき、中央が折衷主義に占拠されたという認識を持てず、第六回大会で敗北したはずの県委の提起した方針を展開せんとしていた。

宣伝、煽動、組織化を軸とし、県委と基本組織を行動的組織として鍛え上げていく方針の継続である。

この方針は、実践において二度にわたる暴力的党派斗争を生み出した。

最初は、三里塚斗争をめぐるマル青同との党派斗争であり、二度目は、この斗争のさ中における関学大べ共斗諸君の突如の暴力的攻撃に端を発した党派斗争である。

マル青同が意図的に三里塚芝山連合空港反対同盟のステッカーの上に彼らのステッカーを貼ったことに対して、我々は、理論上では三里塚斗争への敵対行為であるとして、マル青同諸君を弾かいし、彼らが暴力的敵対を行なったことに対して、暴力的党派斗争をしかけたものである。

思想・政治上の総括を対象化することができず、技術的側面における総括をなしたにとどまったため、主観主義の誤りに気付くことなく、労共委活動の否定的側面を切開することができなかった。

その後、提出された「正規の攻囲、革命的郵便網の建設」という県委の方針は、思想、政治上の総括が欠落していたために、これまでの神奈川県下での活動の現状維持方針であった。

こうした中で、県委は、労共委の主要矛盾が何であるのか、見い出すことができないまま、七五年の九・一五斗争を迎えていたのである。

第六回大会中央委の下での県委活動は、第六回大会の総括を対象化することなく、これまでの県委方針の延長線上で教条主義的対応をなしていたのであると言っていることができる。

我々は、九・一五斗争以降の労共委の党内斗争に於いて、プロレタリア階級の単一革命前衛党を建設していかなければならないことを認識し、マルクス・レーニン主義に立脚することから始めたのである。

又、我々とマル青同の諸君との党派斗争のさ中に、関学大べ共斗の諸君が突如の暴力的攻撃に出たのに対して、「労共委への敵対はプロレタリア階級への敵対である」とする主観主義の認識にもとづき、「やられたら、やりかえす」という暴力的解決方法を選んだのである。

この二つには、各々に相違した点がありながらも、二度の暴力的党派斗争を生み出した思想的根拠は、革命勢力の判別方法の欠如、我々の主観主義の誤りに起因している。

革命の陣営における主観主義は、教条主義と経験主義を生み出すのであり、どちらもマルクス主義の普遍的真理と具体的実践とを分離してしまい、一面的な経験を誇張してしまっているのである。

主観主義は、革命の実践においては必然的に「左」右への動揺としてあらわれるものであり、右翼日和見主義や「左」翼冒険主義の誤りに発展する可能性があることを総括しなければならぬ。

関学大べ共斗との暴力的党派斗争は、関学大べ共斗に我々に対する反革命規定の撤回と大衆的自己批判をさせることを戦斗終結の条件とすることで交渉をなし、戦斗の終結をむかえた。

県委は、戦斗終結後、組織活動を再開するにあたって

(四) 臨中派への質問状とわれわれの見解

「斗争の旗」創刊号 (七六・七)

われわれは、左記の質問状を臨中派に提出してある。

この質問状の内容は、五中総M多数派の諸君が、臨中派の内実を単に中傷し、故意に歪曲しようとしている点だけに限定されているが、われわれは、論争をはじめにあたり、臨中派の諸君が言わんとするところを、憶測やあて推量ではなく、正しく把握するところからはじめたい。

われわれも諸点に関して、逐次われわれの見解を公表していく。ついでには、全ての同志諸君に、この質問状に対する見解の表明と論争への参加を要請します。

勿論、われわれの総括作業は、これらの論点にのみ限定される筈もなく、綱領論争に関する論文はもちろんのこと、六大M主要文書、U一三一号の検討結果も公表していきます。できるだけ多くの論点に関する、すべての同志諸君の意見表明を要請します。

Wの統一と革命的飛躍へ向けたわれわれの進むべき道を、できるだけ早く、全党的意志一致のもとに確定し、第七回全党大会で結実させていこう！

「臨中派への質問状」

神奈川県委員会

以下の諸点に関する当方の見解の文章化が遅れていますが、早急に仕上げ、公表する予定です。貴派のこれらに対する見解もできるだけ早急に示されたく、質問状とします。

① 総路線とは、Wの綱領・組織・戦術をより抽象的に表現したものと思われるが。又は、当面の路線、ことなのか？戦略？

② 綱領の緊要性、および第七回全党大会の緊要性に関し、「路線が先決なのだ」との見解と関連して展開されたい。時期は別として、現在をそれらに向けて集約する方向で、計画的な総括作業を設定し得るのか、否かについて明らかにされたい。

③ 「全党地下化」方針に関して、レーニンの定式「合法的組織の網の目にとり囲まれた非合法党」との関係について展開してもらいたい。（地下化の在り方？）

④ 組織思想の基軸として、臨中派は、五中総M多数派

のブルジョア中央集権制に対置してプロレタリア中央集権制を、更に五中総M多数派の形式民主主義に対置して、「民主主義以上の何ものかが問われている」として独裁をおいたが、レーニンの定式である「民主主義的中央集権制」との関係について展開されたい。

⑤ 党の統一体としての存在様式について、党内には意見の相違が存在し得ること、一定の意見の相違は党の統一と背反しないこと、それを党内斗争により止揚することにより、党は発展する、ということに関しての見解を、貴派の主張する「政治的・思想的統一」との関連で展開してもらいたい。又「分裂主義」に対する見解を問う。

⑥ Wの「大衆運動主義批判」と、レーニンの「党の大衆活動の本質と意義」との関連性、具体的には（一例として）Wの三里塚現斗を今後のWの活動にどのように位置づけるのか、③との関係および召還主義との関係で展開してもらいたい。

⑦ 略

(1) 綱領論争を推し進めよう！

. 以下略

(五) 「毛沢東思想を、M.L主義のもっとも先進的な思想である、とおさえる」

ことについで

「斗争の旗」二号 (七七・一・七)

この言葉は、臨中派文書「現在の路線対立によせて」の中にある。このこと自体については、われわれは、賛成するというよりは、事実として認識する立場に立つ。しかし、ここで問題にしなければならないことは、Wはその前身において、宇野経済学や岩田理論を「先進的な理論、または思想としておさえてきた時刻があったし、また一方、反スタ・トロツキズムの影響下で、毛沢東思想を無視し、中国共産党を「批判」してきた歴史があった、という事実である。

この「くとおさえる」という場合の、判定基準は何に求められるのであろうか？これこそM.L主義に求められねばならず、すなわち、M.L主義文献において検証するとともに、階級斗争の現実において検証した上で判断を下すことが問われているはずである。これは、われわれ

の総路線の基軸にかかわる、一つの基準を定める場合の心構えとして、絶対必要条件なのである。

教条主義的「取りこみ」や、「盲従」は、まさに結果としては、毛沢東思想をはずかしめ、人民から隔離してしまってきた歴史を教訓化することも、一方で現在、問われているはずである。

毛沢東にあっては、マルクス・レーニン主義を基準としたのは当然であり、とりわけ、レーニン主義を先進的理論としておさえてきたはずである。その上で、M.L主義の普遍的真理を中国の特殊性に適用し、中国革命に適用するなかで毛沢東思想が形づくられてきたのである。レーニンにあっては、レーニン主義とは、その核心はマルクス主義をロシアの当時の現実（特殊性）に適用し、帝国主義時代に適用し、マルクス主義を発展豊富化させたことである。

しかし、レーニンも、毛沢東も、マルクス主義に忠実であったという事実は、けっして、マルクス語録を守ったとかいう歪小なことではなく、自身の立たされている現実具体（特殊性）を、まさにマルクス主義に忠実に研究し、革命の勝利を導きだした、という点にある。しかもマルクス主義の核心である国際主義は、それ故に、レーニン主義、毛沢東思想に普遍性を与え、新たな教訓

二六頁) できている。これは、基準なきスターリン批判の中で、実質はトロツキズム、又は修正主義的偏向により、遠い彼方に忘れ去られようとしていたレーニンの、とりわけロシア社会民主労働党二回大会で強調され、規約として勝ちとられてきた中央集権主義の思想を復権させ得たことに、重要な意義があった。

しかし、そのことは、その後の五大、六大、現在の中で、どのように物質化されてきたのであろうか？ 海原26号や六大Mの「組織活動に関する手引」等に見られる、党内矛盾を、形而上学的に克服しようとしてきた技術的手直しでは、4.5により、まさに総破産をつきつけられたのであり、その後の、多木派の形式民主主義と臨中派の独裁、といった論争はその否定的現実を、如実に物語っているのではなからうか。

まずは、レーニンの組織思想について見ていきたい。

「ふらついた動揺分子に対しては、われわれは、戒厳状態をしていてもかまわないばかりでなく、そうする義務がある。そしてわれわれの党規約の全体、いま大会によって確認されたわれわれの中央集権主義全体は、政治的あいまいさの非常に数多い源泉にたいする戒厳状態にはかならない。あいまいさに対しては、まさに特別法が例外法でさえが必要である。そして大会のとった措置は、こ

ならそれは、プロレタリアートの階級斗争を組織するものでもないだろうからである。」(④—一九八頁、「われわれの当面の任務」)

「政治的反対や抗議や憤激のあらゆる現われを結びつけて、一つの総攻撃にする全国的な中央集権化された組織、職業革命家からなりたち、全人民の真の政治的指導者たちにひきいられる組織」(⑤—四一〇頁「なにをなすべきか」)

「秘密活動のいっさいの糸をその手に集中する、このような強力で厳格に秘匿された組織、必然的に中央集権的となるほかない組織」(⑤—四四二頁「同上」)

Wにおける四回大会で打ち出された「指導の集中と責任の分散」の原則についてレーニンは、「一同志にあたる手紙」で次のように展開している。

「党組織および党活動のきわめて重要な原則……。プロレタリアートの運動と革命斗争との思想のおよび実践の指導の点ではできるだけ強い中央集権化が必要であるが、党中央部に(したがってまた一般に全党に)運動の事情を熟知させるという点、党に対して責任を負う点では、できるだけ強い地方分散化が必要である。運動の指導は、経験の試練を経た職業革命家たちのできるだけ少数のできるだけ同質のグループが行なわなければなら

のような法律や、このような方策のために必要な、強固な土台をつくりだして、政治的方向を正しく定めたのである。」(⑥—四六二頁「ロシア社会民主労働党第二回大会」)

ところでWにあっては、中央集権主義は折衷主義を生み出し、正当化するものとして機能してきた観があり、あいまいさ、政治的あいまいさの温床として機能してきたのではあるまいか？ このあいまいさが、その存在をもちや許されなくなった時、路線斗争を突きつけていた部分(臨中派)により、党中央のみならず、われわれの否定的な中央集権制そのものもろくも崩壊したのであった。問題は中央集権主義一般にあるのではなく、われわれの中央集権制にこそ問題があったことをみなければならぬことは明白である。

「他方の社会民主主義的な活動を完全に自由に行なわせる必要と、単一の、したがって中央集権的な党を結成する必要とを、どう両立させるか？ 社会民主主義派は、その力のすべてを、いろいろな工業中心地で、いろいろな仕方、別々のときに現われてくる自然発生的な労働運動のなかから汲みとる。他方の社会民主主義的組織の活動は、党の全活動の基礎である。しかし、これが孤立した手工業者の活動であるあいだは、厳密にいえば、それを社会民主主義的活動と呼ぶことさえできない。なぜ

ない。運動に参加するのは、プロレタリアート(および国民のその他の階級)の種々さまざまの層に属する、できるだけ多数の、できるだけ多種多様なグループでなければならぬ。

われわれは運動の指導を中央集権化しなければならぬ。

われわれはまた、黨員の一人ひとり、党に所属している、あるいは同調しているサークルの一つ一つの、党に対する責任をできるだけ地方分散化しなければならない。事情を熟知していなければ中央集権化は不可能なのだから、指導の中央集権化のためにもそうしなければならぬ。

この責任の地方分散化は、革命的な中央集権化の必須条件であり、その欠くことのできない補正手段である。

このような地方分散化は、われわれの運動のもっとも緊密な実践的必要の一つをなすものと一般にみとめられている、分業の他の半面にはかならない。

それだからこそ、規約の問題はきわめてわずかな意義しかもたないのである。各サークル、活動の各機能について、規則的な報告義務を課することをもって規約におきかえるなら、實際上、おそらく、規約なしにでもすすませられるということが明らかになったとおもう。

また、規約が無益なのは、革命的活動がかならずしもつねに、それに一定形をあたえることをゆるさないからだけではない。そうではない、定形をあたえることは必要であり、われわれは、可能性に応じて全活動に定形をあたえるよう努力しなければならない。だがそれは、規約によって達成しうるものではなく、ただもっぱら党中央部への正確な報知によってのみ達成しうるものである。こうしてはじめてそれは、現実の責任性および、(党内での)公開性と結合した、現実の定形性となるだろう。実際、われわれのあいだの、重大な紛争や意見の相違は、実質上「規約」にもとづく「投票」によってではなく、斗争と「脱党」の威嚇によって解決されていることを、いったい誰が、知らない者があろうか？

そうして、このような有益な、欠くことのできない定形性は、けっして規約によってつくりだされるものではなく、もっぱら党内公開制によってつくりだされるものである。専制の治下にあるわれわれにとっては、党中央部に規則的に状態を報知することのほかに、党内公開性の手段と武器はあり得ない。

そしてわれわれが、この公開制を広範に適用することを得たときにはじめて、われわれのあいだに、あれこれの組織の機能が実際につくりあげられるであ

ろうし、このように広範な多年の経験にもとづいて、はじめて紙上の規約でない規約をつくりあげることができるのである。」(⑥一〇九、二二四頁「われわれの組織上の任務について、一同志にあたえる手紙」)

五中総M派の諸君！坊主の經文読みふりに規約の条文を唱えたり、規約の精神とやらの空文句で、「少数は多数に従え」とわめき立てている間に、自らが少数派になりはたかことを冷静に考えてみたまえ。Wの規約を生かすも殺すも、それは、それを現実に応用する主体次第だということ、五中総Mの行爲は、まさにWの規約をはずかしめてきたのだということを、頭を冷して考えてみたまえ！

例えば、五中総Mの諸君は、六中総を前にして、自己の存立の正当化をはかるため、またもや規約を悪用し、神奈川地区委員を解任し、神奈川地区委員会をこれにより解散せしめたとうそぶき、しかも神奈川の全基本組織を直轄にするといった茶番を演じてみせた。ところで、この各基本組織のどれ一つに対しても、この時以来五中総Mからは何の音沙汰もないのである。手刷りのD紙がアリバイ的に、しかもD社のゴム印をバンと押した封筒で送られてきているだけである。

中央委員会の地方委員会に対する解散権に関するレ

ニンの見解を次に示しておく。

「同志エゴロフと同志ボポフは多少とも大きな確信をもって、...中央集権主義を制限しようとして努力した。彼らはすでに規約委員会で、地方委員会を解散する中央委員会の権能を制限して、評議会の同意を必要とするよう、そのうえ、とくに列挙したばかりにかざるよう提案した。三名の規約委員(グレボフ・マルトフ・私)は、これに反対した。そして大会は、エゴロフとボポフの提案を否決した。」(⑦一二七頁「歩前進二歩後退」)

「私は、中央委員会による地方委員会の解散権に賛成していたが、われわれの分派反目が激烈をきわめた時期には、党評議会において、それに反対を表明した。というのは、この権利を適用することは、ある程度穏当ではなかったからである。」(⑧一三八三頁「ロシア社会民主労働党第三回大会規約第九条の案文に関する演説」)

「中央委員会の権限と地方委員会の権限とを、また思想斗争とカク乱的な喧嘩とを、もっと正確に仕切ろうとする試みも、また同時に、第二回大会以後の諸事件の全行程から不可避的に出てきたのであった。われわれがこれを見るものは、首尾一貫して系統的な党の経験の蓄積である。これらの正式の決定、すなわち党規約改正の要点がいったいどこにあるかについては、...、ただ次

の二つのことだけを指摘しておく。

第一に、文獻を出版する権利を保障したこと、解散に対して、諸委員会を保障したことは、離脱した民族的社会民主主義諸組織の党への復帰を容易にするものと期待してよい。

第二に、諸委員会の人的構成の不可侵性を確立したことによって、この不可侵性を悪用する可能性、すなわちまったく不適当な委員会の更迭不能性という不便を予想しなければならなくなった。こうして、党組織に所属している地元の労働者の三分の二の要求があるばあいには、その委員会を解散する諸条件を規定した党の新規約第九条が生まれた。

この規則が、どれほど実際的なものであったかを決めるには、経験の指示をまつことにしよう。」(⑧一四一二頁「第三回大会」)

このレーニンの團結の願いに満ちあふれる組織思想に対して、五中総Mのそれは、Wの規約をセクト的利益の貫徹の手段におとしこめ、そこには機關と規約が存在するのみで、生きた黨員が存在する余地は、まったくないのである。

さてレーニンは、その組織原則を四回大会に向けて次のようにまとめていきました。

「党組織の諸原則」①党内の民主主義的中央集権主義の原則は、いまだに一般に承認されている。②現在の政治的諸条件のもとで、この原則を実行することは、困難になっているが、しかしなお一定の範囲内では、可能である。③党組織の機密機構と公然の機構とを混同することとは、党にとってきわめて有害なことであり、政府の挑発を利用するものであることが明らかとなった。

以上のことを考慮してわれわれは、つぎのことを承認し、大会にこれを承認するよう提案する。

- ① 党組織における選挙制の原則は、下から上まで実施されなければならない。
- ② この原則からそれること、たとえば、二段階選挙または選挙された機関への自主補充等々は、警察による克服しがたい障害がある場合と、とくに規定された例外的な場合にかぎってゆるされる。
- ③ 党組織の秘密の中核を維持し、強化することが緊急に必要である。
- ④ あらゆる種類の公然たる行動（出版物・集会・団体とくに労働組合等々における）のためには、けっして秘密細胞の保全を害することがないように、組織に特別の部門がつくられなければならない。
- ⑤ 党の中央機関は単一でなければならない。すなわち

示している。

その起因するところが、素朴な限界性によるものならば、まだ可愛げもあるのだが、その内実は、彼らのセクト的利益の貫徹にあるのだから救いようもないのである。こうしたなかで考えだされた反対派の海原に対するMコメントなる作風は、欺瞞的という表現をこえて、そのよこしまな意図を余りにもあけすけに示したものであった。「われわれは、あきらかに食い違っている見解の間に公然たる論戦が欠けていること、きわめて本質的な問題に関する意見の相違をおしくそうとする志向のあることを、現在の運動の欠陥の一つとさえ考えている。」（④一三〇四頁「イスクラおよびザリヤ」編集局の声明草案」）

五中総Mの、文書通信五二による「服務命令」という踏み絵を臨中派がふむことを先決としたことに対して、党内斗争による政治的思想的統一が先決であるとして斗かってきた神奈川県委員会、すでに全国協議会（第一次……これに関しては別の機会に書きます）という路線斗争の場を構築し、臨中派とともに、Wの進むべき道線路線の構築を目指して斗かってきている。五中総Mは今こそわれわれの団結の呼びかけに応え、道を誤ることなく、われわれとともに前進すべきである。

共同の党大会が単一の中央委員会を選出し、それが中央機関紙編集局等々を任命しなければならぬ。」
（⑩一四二頁「ロシア社民労党統一大会に提出すべき戦術綱領」）

（II）党内斗争について

「共産党がプロレタリア階級の前衛である以上、党内に矛盾や斗争はあるべきではなく、純粋なうえにも純粋でなければならないと考える者がいる。これは唯物弁証法にそむく一種の無邪気を考えるのである。」（北京周報14巻三四号「党内斗争と党の発展」）

「党内に矛盾があり、斗争があることは、客観的に存在する事実である。いかなる事物の発展もその内部の矛盾・斗争を通じて実現される。党もその例外ではない。」（北京周報十四巻三十六号「プロレタリア階級は、革命的樂觀主義者である」）

五中総Mによる、臨中派に対する形而上学的解体吸収路線、内部反対派に対する切り捨て純化路線は、彼らの政治思想面における右翼日和見主義、合法主義の反映であり、分裂主義そのものである。それは、彼らの組織思想における教条主義、形而上学者ぶりを余すところなく

「論文」なにをなすべきでないか？」は、われわれの党生活のきわめて重要な、そしてまさに現情勢のもとでは極めて緊要な諸問題を提起している。私がなによりもまず言いたいことは、論文の筆者が、党の統一をまもり、新しい分裂をさける必要がある、と強く主張しているのは、私の考えるところではまったく正しい、ということである。指導者が平和愛好とおだやかな態度と謙歩心とを呼びかけることは、総じて極めて賞讃に値するし、とくに現情勢のもとではそうである。かつての経済主義者はかりでなく、いくらか一貫性を欠くことを欠陥とする社会民主主義者の小グループまでも、破門したり、党から除名したりするのは、無条件に愚かなことであろう。それはあまりにも愚かなことなので、除名に賛成しかねない、一本調子で頑固で、愚かものに思えるソバケウィッチらに、筆者がいらいらした口調でものを言っているのも、われわれには全くうなづける。

われわれは、それ以上のことまで考えている。われわれに党綱領と党組織があるようになれば、われわれは意見を交換するために党機関紙の紙面を喜んで開放しなければならぬだけでなく、一貫性に欠けるために修正主義のいくつかのドグマを擁護したり、なんらかの原因から自分たちのグループの特殊性と個性を固執している

グループ、あるいは、論文の筆者の表現では、小さなグループにたいして、小さなものであっても、彼らの意見の相違点を系統的に述べる可能性をも与えなければならぬ。

すなわち、無政府的个人主義にたいして、あまりにも一本調子をソバケウィッチ式に激しい態度をとらないためには、われわれの考えるところでは、中央集権主義の見事な図式と規律への絶対服従とからいくぶん後退することまで含めて、できるだけのことをする必要がある。それは、これらの小グループに意見を述べる自由を与えるためであり、意見の相違が深いものであるか、あるいは、大したものではないかをわきま、一貫性を欠いている点、いったいどこにあるのか、それはどういう点に、また、いったい誰の側に見られるのかを判定する可能性を全党に与えるためである。

実際、セクト的なサークル的活動の伝統をきっぱり投げ捨てて、大衆に依拠する党のなかに、断固たるスローガンをかかげるべき時である。もっと光を、党はすべてを知れ、ありとあらゆる意見の相違、修正主義への復帰規律違反等を評価するためのいっさいの、まったくいっさいの材料を全党に提供するようによせよ、と！

党活動家全体の自主的判断にもっと信頼をおかなければ

ない。

広範な公開性、これこそさけることができる分裂をさけるために、また、すでにさげることができなくなった分裂なら、その害を最小限に小さくするために、もっともまじがいのない、唯一の、確実な手段なのである。口先だけでなく、ほんとうに大衆の党になるためには、われわれは、ますます広範な大衆を、党のあらゆる問題に参加させるようにし、彼らをたえず引上げて、政治的無関心から抗議と斗争へ、一般的な抗議精神から社会民主主義的見解の意識的な受容へ、党にたいする支持から党への組織的参加へと向かわせなければならぬ。だが、大衆へのあれこれの影響が、その解決にかかっているという問題に、きわめて広範な公開性をもたせざるを得ない結果を達成することができようか？

(一方では)、全党が中央部に適するような人を、系統的にこつこつと、うまずたゆまず養成していくことが必要であり、党がこの高い部署の候補者の一人一人の全活動を掌をさすように見、彼らの個人的特性、その長所と短所、その勝利と「敗北」までもよく知りつくすことが必要である。党のあれこれの「指導者」の「敗北」はたとえ部分的な敗北であっても、その一つ一つを党が常に見ているようにすることが必要である。

ばならない。彼らが、そして彼らだけが、分裂傾向をもつ小グループの度をはすれた性急さをしずめることができ、彼らのゆっくりして目だたないかわりにねばりづよい働きかけによって、そういうグループに党規律をまもろうとする善意な意志をおこさせることができ、無政府主義的个人主義の突をしずめることができ、分裂に心をひかれていた分子によって誇張されている意見の相違が取るにたらない意識しかもたないということを、彼らの冷静さという一つの事実だけで証明し、立証し、明示することができるのである。

「なにをなすべきでないか？」(一般になにをなすべきでないか、また分裂をひきおこさないようにするにはなにをなすべきでないか)という問に対しては、私は何よりもこう答えたい。分裂の機縁が発生し、増大しつつあることを、党にかくしておいてはならない。そういう機縁となっている事情と出来事を、少しでもかくしておいてはならない。それだけではない。党にかくしておかないだけでなく、できるだけ第三者の公衆にもかくしておいてはならない。と、「できるだけ」というのは、秘密保持の必要上かくさなければならぬことがあるのを考慮しているからである。しかし、われわれの分裂にはこの種の事情はきわめてとるにたらない役割しか演じて

どんな政治家でも、その経験においてなんらかの敗北をなめずすごしたものはない。そして、もしわれわれが、大衆への影響とか、大衆の善良なる意志を闘いとるとかいうことを真剣に論じているのであれば、われわれは、これらの敗北がサークルや小グループのかびくさい空気のなかにかくされてしまわないように、またそれが万人の法廷にもちだされるように全力をあげなければならぬ。

これは、一見バツが悪いようにみえる。個々のあれこれの指導者にとっては、それが侮辱的におもわれることもあるにちがいない。しかし、このバツが悪いというまじがった感情を、われわれはどうしても克服しなくてはならない。それは党にたいする、労働者階級にたいする、われわれの義務である。

こうすることによってのみ、そして、ただこうすることによってのみ、われわれは、有力な党活動家全体に、自分たちの指導者を知り、その一人一人を適所にすえる可能性をあたえるであろう。広範な公開だけが、あらゆる一本調子を、一面的な、気まぐれな偏向に、正しい方向をあたえる。それだけが、時とすると愚劣でこっけいな、小グループのいさかきを、党の自己教育のための、有益で必要欠くべからざる材料に変えるのである。

こうした公開した討議をつづけていってはいじめてわれわれのもとには、真に調和した指導者集団ができあがるのであり、こうした条件があつてはじめて労働者は、われわれを理解しなくなるおそれのないような状態におかれるであらうし、そうなったときにはじめてわが司令部は、司令部にしたがうと同時に、司令部に正しい方向をあたえる軍隊の、善良で自覚ある意志に真に依拠するようになるであらう！」(①一九八頁「イスクラ編集局の手紙」)

五中総M派の諸君は、現在のWの内部対立、党内斗争に関して、セクト主義以外いかなる思想性も持ちあわしていない。われわれは、五中総Mの分裂主義を容認することはできない。われわれは、Mコメント等で、姑息に党内斗争の圧殺をはかり、延命しようとしている五中総Mの無内容さにガマンがならなかった。

五中総Mのもとで未だ情眼をむさぼっている諸君！諸君に強く呼びかける。直ちに目覚めよ。目覚めて斗いに起ち上がれ。五中総Mの眠り薬に注意せよ。

「広範な公衆はいつもそうなのだが、なによりもまず新しい分裂の俗物的な説明に、すなわち、この分裂はあれこれの指導者のなにか悪い習性や、国外からの影響、サークル主義等々の影響によるものだ、という説明に引

っかかりやすい。われわれが俗物的説明と呼ぶのは、分裂の形態や、動機や外面的いきさつ以外に、なにひとつ説明できないこれらの事情を考慮することをさして言うっているのではなく、不一致の思想的・政治的基礎、原因、根源を理解しようとしないうこと、あるいは理解する能力のないことをさしているのである。

分派とは、党の内部で意見を同じくするものの自由な結合体である。……言い争いや罵りあい、ふかい思想的不一致の産物であることを理解しなければならぬ。このことを理解してこそはじめて、われわれは、社会民主主義者が無益な、不面目な言い争いを、不一致の思想的根源の解明とおきかえるのをたすけることができるであらう。偶然ではなく、一般的に病気の無数の現れの一つである。この病気をかくそうとする試み以上にま

ちがった、有害なものはない。」(⑥一三五頁「召還主義と創神主義の支持者の分派について」)

最後に、われわれが追究すべき組織思想について引用しておきます。

「分裂はやんだ。社会民主主義的プロレタリアートとその党は単一でなければならない。組織上の意見の相違は、ほとんど取り除かれた。重要な重大な、非常に責任の重い任務が残されている。それは、党組織内の民主主

義的中央集権主義の諸原則を、現実を実現することであり、ねばり強い活動によって下級組織を口先ではなく、実際に党の基本的な組織的細胞とすること、すべての上級機関を実際に選挙されたもの、報告義務を負うもの、更迭しうるものによることである。

ねばり強い活動によって、すべての自覚した社会民主主義的労働者を含むような、また自主的な政治生活を営むような組織をつくりあげなければならない。これまでは、むしろ紙の上で認められている、あらゆる党組織の自治は実行されるものとなり、また実行されなければならない。地位争いや、他の分派に対する恐怖心は、これを取りのぞいてしまわなければならない。われわれのあいだには、単一の党組織と、この組織内の社会民主主義思想の種々の傾向間の純思想的斗争とが実際にあるようにならない。

それを勝ち取ることは、まだ容易ではないし、われわれはそれを一挙に勝ち取ることはできないであらう。しかし道は示されているし、原則は宣言されている。だから、われわれは、この組織上の思想の理想の、完全な、徹底的な実現を目標にしなければならない。」(10一三四五頁「ロシア社会民主党統一大会についての報告」大会の結果11)

(七) 我々の主観主義を

克服しよう!!

この間二年間の労共委内部斗争におけるわれわれの見解を、若干報告してきましたが、われわれとてこの二年間のデッサンとして充分なものとは考えていません。今後とも、諸論点の定式化に努力していきます。

さて、われわれはこの二年間を闘う中で、われわれの労共委総括のための総括視点として、われわれが深く侵されていた「主観主義」を、すべての限界性の根源的要因としてえぐり出してきました。客観主義的、傍観者然としたインテリゲンチヤの評論家的マルクス主義に對置された斗争は歴史の必然であり、革命的素因を内包したものであるのですが、この斗いのゆり込んだ新左翼は、総体として、主観能動性と主観主義を混同するが、又は区別する能力を持たなかったために、主観主義に陥こんでいました。

しかし主観主義とは、歴史的限界性などと表現するには、余りにも根本的な思想問題であります。主観主義と

は、観念論的形而上学の思想・作風であり、主観と客観、認識と実践の分離をその基本的特徴としています。主観主義は、革命的実践のなかでは必然的に、「左」右の動揺としてあらわれ、右翼日和見主義や「左」翼冒険主義の誤りに発展し、革命に重大な危害をおよぼすことさえあります。「主観主義がうたふおそれないかぎり、マルクス・レーニン主義の真理は勢いをえず、党性は強固にならず、革命は勝利しない。」（毛沢東「われわれの学習を改革しよう」）

革命の陣営における主観主義は、教条主義と経験主義という二つのあらわれ方をします。教条主義は実際から出発せず、書物の知識から出発します。それは、実際の過程のなかの感性的経験を軽視し、われわれの認識が実践過程のなかの豊かな感性的認識からのみ出発し、理性的認識にたかまり、ふたたび実践にたちもどって検証され、発展していった、はじめて真に客観的真理性に合致した認識を獲得するようになることを否定します。革命的実践において、教条主義は、マルクス・レーニン主義の立場、観点、方法にもとづいて実際経験をまじめに研究し、具体的状況を具体的に分析し、結論をみちびきだし、革命的行動を導く羅針盤にし、さらに大衆斗争の実践のなかでその理論を検証し、発展させるのではなくして、抽

象的な概念、定義から出発し、マルクス・レーニン主義を死んだ教条とし、個々の字句、個々の結論や原理を具體的条件ゆきによりにあてはめようとするものです。

教条主義とは反対に、経験主義は、局部的経験だけを認め、理論的作用を軽視するものです。経験主義は、認識過程の弁証法がわからず、いくらかの直接的経験による知識に満足し、認識が感性的段階にとどまっているかぎり、事物の矛盾を把握できない、ということがわからないうのです。つまり、感覚されたものを、われわれはただちに理解することはできず、理解したものだけをより深く感じることができると、感覚は現象の問題しか解決できず、理論だけが本質の問題を解決する、ということがわからないのです。それ故に、経験主義は、感性的経験を理性的経験にたかめることができず、革命の実践にたいする革命理論の指導的意義を軽視し、マルクス・レーニン主義の革命理論の学習を軽視するのです。それは、個人的なせまい経験で満足し、はては局部的な経験を普遍的な真理だと認識するので、具体的な矛盾を具体的に解決することができません。

「主観主義は、一部の党員のあいだに根づく存在しているが、これは政治情勢の分析や活動に対する指導にとって、非常に不利である。なぜなら、政治情勢に対す

る主観主義的な分析や活動にたいする主観主義的な指導は、その必然的な結果が日和見主義か、そうでなければ盲動主義になるからである。」（「党内の誤った思想を正すことについて」毛沢東）

「主観主義的態度のもとでは、周囲の環境を系統的に綿密に研究せず、ただ主観的な熱情だけで活動し、中国の今日の姿についてはわかったようではわからない。この態度のもとでは、歴史をたちきり、ギリシャを知るだけで中国を知らず、昨日や一昨日の中国の姿についてはくらやみ同然である。

指導すれば、革命をそこなう。要するに、この反科学的、反マルクス・レーニン主義的な主観主義の方法は、共産党の大敵であり、労働者階級の大敵であり、人民の大敵であり、民族の大敵であり、党性が不純なことのあらわれである。大敵をまえに、われわれはそれをうちたおす必要がある。マルクス・レーニン主義の真理が台頭し、党性が強固になり、革命が勝利するには、主観主義をうちたおすほかはない。科学的態度がなければ、すなわち理論と実践の統一したマルクス・レーニン主義の態度がなければ、党性がないとか、党性が不完全だということになるのを、われわれは指摘すべきである。」

（毛沢東「われわれの学習を改革しよう」）

「われわれが主観主義に反対するには、唯物論を宣伝し、弁証法を宣伝しなければならない。だが、わが党内には、唯物論の宣伝に重きをおかず、弁証法の宣伝にも重きをおかない同志がなお数多くいる。」（「党の作風を整えよう」毛沢東）

このような思想の根源にかかわる主観主義に気が付かず、結果としてはマルクス・レーニン主義を軽視してきたことは、労共委にとって致命的であった。われわれは今後とも、われわれの提出した「党階級一元論」を正しくマルクス・レーニン主義にのっとって再構築するとともに、主観主義克服のために、諸具体命題に関して論争を提起していくものである。すべての革命的共産主義者が、ともに世界革命、社会帝国主義、社会主義、国家論等々に関して見解を表明するとともに、マルクス・レーニン主義に立脚するべく努力することを要請します。

マルクス・レーニン主義に

立脚するために

一 プロレタリア革命に勝利しよう！

原始社会をのぞけば、人類社会の歴史は階級斗争の歴史である。

人類社会は、それ自身の矛盾の運動により法則にしたがつて、低い段階から高い段階へと発展するものである。人類社会は、原始社会、奴隸社会、封建社会、資本主義社会を経て、社会主義社会そして共産主義社会へと到達する。

我々の存在している資本主義社会では、支配階級であるブルジョアと被支配階級であるプロレタリアートとの間で非和解的な斗争が斗われている。

プロレタリアートのブルジョアを打倒せんとする斗争は、プロレタリアートが自己の解放を獲得する唯一の正しい方法であり、そして又社会の発展法則の客観的要求と合致している。

アジが国家権力を掌握しているときには、平和のうちに「収奪者を収奪すること」はありえない。

プロレタリアートと勤労人民が暴力革命を遂行して政権を武力で奪取し、ブルジョア国家機関を徹底的に打ち砕き、プロレタリア階級独裁を樹立することによってはじめて、プロレタリア革命の勝利は保証されるのである。

ロシア革命、中国革命の歴史的経験が証明しているように、ブルジョアを打倒する革命斗争においては、マルクス・レーニン主義で武装したプロレタリアートの党の指導が欠くことができず、自国の革命斗争の具体的実践とマルクス・レーニン主義の普遍的真理を結合したプロレタリア革命の路線が不可欠である。

プロレタリア革命を勝利に導くには、マルクス・レーニン主義に立脚して、プロレタリアートの独自政党を建設し、プロレタリアートと勤労人民の連合を基礎とした統一戦線をつくり、武装斗争を展開しなければならない。

マルクス・レーニン主義に立脚するには、弁証法的唯物論、史的唯物論というプロレタリア階級の世界観、方法論をしっかりと身につけ、マルクス主義政治経済学を基礎として、科学的共産主義の理論を具体的階級実践と結びつけていなければならない。

このプロレタリア革命は、ブルジョアとプロレタリアートとの間の階級矛盾、階級斗争発展の必然的結果であり、最高の形式である。

プロレタリア革命は、プロレタリア階級が自己の政党を独自に組織して、プロレタリアートと勤労人民による広汎な連合を基礎として、ブルジョア階級独裁と資本主義体制を転覆し、プロレタリア階級独裁と社会主義体制を打ちたてる革命である。そして最終的には、全ての搾取制度、全ての階級の消滅を目的とする革命である。

革命の根本問題は国家の政権問題である。国家の政権が一つの階級の手から他の階級の手に渡ることが革命の基本的標識である。世界におけるあらゆる革命斗争は、いずれも政権奪取、政権強化のためであり、そして革命勢力に対する反革命の攻撃は、反革命勢力の政権維持かもしくは政権復活のためのものである。

プロレタリア革命のもっとも根本的な問題は、そして歴史的任務は、ブルジョア階級の国家権力機関を徹底的に打ち砕き、プロレタリア階級独裁を樹立するところにある。

ブルジョアは、膨大な官僚・軍事機構を掌握し、彼らの反動的支配を維持するために反革命暴力を用いて、プロレタリアートの運動を武力で鎮圧している。ブルジョア

二 プロレタリア階級の世界観・方法論を身につけよう！

弁証法的唯物論、史的唯物論は、マルクス主義の全等説の理論的基礎であり、プロレタリア階級の世界観、方法論であり、プロレタリアートが階級斗争を闘う上での思想的武器である。

マルクス・エンゲルスは一八四〇年代に、プロレタリアートの斗争の歴史的経験と自然科学の新しい成果を総括し、人類の文化・科学のすぐれた成果を批判的に受け継ぎ、とくにヘーゲル弁証法の「合理的核心」を批判的に吸収し、その観念論的外殻を捨て去り、フイエルバッハの唯物論の「基本的核心」を批判的に吸収し、その形而上学と宗教・倫理などについての学説の観念論的雑物を捨て去り、歴史上はじめて、唯物論と弁証法を統一した。

マルクス主義以前の哲学は、自らの階級性をずっと露してきていた。マルクス主義の哲学である弁証法的唯物論は、その誕生と同時に、この哲学がプロレタリアートの世界観であり、プロレタリアートが階級斗争を闘う上での思想的武器であることを公然と表明した。マルクス主義の哲学は、実践に対する理論の依存関係、すなわち理論の基礎は実践であり、理論は、また転じて実践に奉

仕するものであることを強調する。

マルクス主義の哲学の重要性は、客観的世界の法則を理解することによって世界を説明するのではなく、客観的世界の法則の認識によって能動的に世界を変革する点にある。

マルクス主義の哲学の党派性の原則は、革命性と科学性、理論と実践の統一である。

それは、我々がプロレタリア階級に依拠して、弁証法的唯物論と史的唯物論の観点・方法を堅持し、あらゆる形而上学・観念論さまざまなブルジョア思想、修正主義の思想・路線と斗争するよう求めている。

① 唯物論と観念論

唯物論は、世界はその本質からいって物質的なものであり、物質は人間の意識あるいは精神に依存することなく独立に存在する客観的実在であり、意識は物質的世界の人間の頭脳への反映であると考える。観念論は、物質的世界が客観的存在であることを認めず、意識あるいは精神を全て事物の根源とみなし、物質は意識あるいは精神の産物にすぎないと考える。

物質に対する精神の、存在に対する思考の関係、すなわち物質と精神のどちらが第一的であるかという問題を解決する上で、唯物論哲学と観念論哲学は根本的に対

立している。

唯物論の基本点は、次のようにまとめられる。世界には、まず物質があって、そのうち意識が生じた。人間と人間の意識に先立って自然界が存在した。意識は人間の頭脳の機能であり、物質的世界の頭脳における反映である。物質は意識を離れて独立して存在できるが、意識は物質から生まれたもので物質を離れて存在できない。意識は物質的世界の反映である。物質的世界なしには反映について語ることはできず、どんな意識も存在しない。

この唯物論の基本点は、人類の実践活動のうちで打ちたてられ発展したものであり、実践によって立証された科学的結論である。

観念論は、直線性と一面性、硬直と化石性、主観主義と主観的盲目性という認識論上の誤りをもっている。

観念論は、主観と客観の分裂、認識と実践の分離、形而上学の観点で複雑な認識過程に対処し、実践が認識の基礎であることを否定し認識の弁証法を否定する誤りをもっている。

観念論哲学は、すべての反動階級と反動勢力が科学に反対し、進歩に反対するための道具であり、つねに搾取階級の利益を代表しており、いつも宗教と密接な関係にある。

観念論は、あらゆる日和見主義、修正主義、そしてブルジョア反動路線の理論的基礎でもあり、弁証法的唯物論の敵である。

② 弁証法と形而上学

弁証法は矛盾の運動・発展・変化の一般法則についての哲学学説であり、形而上学と対立する世界観・方法論である。

古代の哲学者は、論敵の矛盾をあげ、それを克服して真理を求める方法を弁証法といった。それはのちに、世界発展の普遍的法則の探究にまで拡張され、世界を認識する弁証法的方法となった。

弁証法の発展には、古代の素朴な弁証法、ヘーゲルの観念論的弁証法、マルクス主義的弁証法の三つの基本形態がある。

マルクス主義の弁証法とは、自然・人間社会・思考の運動と発展の普遍的法則に関する科学であり、プロレタリアートの世界観・方法論である。

形而上学は、すべての現象を互いに孤立した、静止した量的変化のみで質的变化のない、内在的矛盾を全く含まないものとする。

弁証法的唯物論の宇宙観は、事物の発展を事物の内部から、又ある事物の他の事物に対する関係から研究する

ことを主張する。すなわち事物の発展を事物の内部の必然的な自己運動とみなし、また、一つ一つの事物の運動は、全てその周囲の他の事物とたがいに連関しあい、影響しあっているものとみる。事物の発展の根本原因は、事物の外部にあるのではなく事物の内部にあり、事物の内部矛盾にある。対立物の統一と斗争の学説は、弁証法的唯物論の核心であり、対立物の統一の法則は基本的法則である。

質と量、肯定と否定、本質と現象、内容と形式、自由と必然、可能性と現実などは、いずれも対立物の統一である。

マルクス主義の弁証法は、本質的に革命的であり、批判的である。その合理的形態において、弁証法は、ブルジョアジーとその代弁者たちにとって憤激と恐怖である。なぜなら弁証法は現存するものの肯定的理解のうちにまた、その否定、必然的滅亡の理解を含ませ、あらゆる既成の形態を不断に運動から、従ってまた、その一時的な側面から理解し、なにもものをも恐れずにいるからである。

形而上学は、世界を孤立的、一面的、静止的な観点で見、世界のすべての事物を永遠にたがいに孤立した、変化しないものとみなすことが特徴である。たとえ変化があるととしても量的増減と場所の変化だけであり、しかも

その増減、変動の原因は、事物の内部にあるのではなく外部にある、つまり外力によって動かされるとみる。即ち、形而上学は、個々の事物をみて、それらの相互の連関を忘れ、それらの存在を見て、その生成と消滅を忘れ、それらの静止を見て、その運動を忘れるのである。

現在、形而上学はブルジョアジーと修正主義者が階級協調、階級斗争消滅論を吹聴し、弁証法的唯物論とプロレタリア革命、プロレタリア独裁に反対するために使われている。

○ 弁証法的唯物論・史的唯物論

弁証法的唯物論は、唯物論と弁証法を統一させた科学的な世界観である。

物質世界は、それ自体に固有の法則にしたがって運動し、変化し、発展し、事物はすべて一が分れて二となると考える。事物の矛盾する二つの側面の斗争は、事物をたえず低い段階から高い段階へと発展させる。したがって、事物の矛盾の法則、すなわち対立物の統一の法則は、物質的世界の運動・変化・発展のもっとも根本的な法則である。

毛沢東は『矛盾論』の中で「この弁証法的宇宙観が主として教えていることは、さまざまな事物の矛盾の運動を観察し、分析することに熟達すると同時に、その分析

にもとづいて、矛盾の解決方法をさし示すことである」と正しく指摘している。

弁証法的唯物論は、人間の認識は、客観的物質世界の運動、変化の人間の頭脳への反映であるとする。

弁証法的唯物論の認識論は、唯物論的かつ弁証法的に人間の認識の内容、根源、発展過程の問題を解決した。それは物質が精神に変わり、精神が物質に変わるものであり、この主観と客観の弁証法的統一の実現には実践を経なければならぬ。

認識は実践に由来するが、また転じて実践に奉仕もする。実践・認識・再実践・再認識と循環往復して尽きることがない。これは、人間が正しく世界を認識し、能動的に世界を改造する無限の発展過程である。従って、弁証法的唯物論の認識論は、能動的で革命的な反映論である。

対立物の斗争が対立物の転化を引き起こすことによって、事物には性質の変化と飛躍が生じ、矛盾の統一物が生まれ、事物発展の古い過程は新しい過程にとってかわられる。

史的唯物論は、唯物論の原理を社会生活と歴史へとおしひろめ適用することであり、人類社会の歴史発展のもっとも一般的法則に関する科学である。

史的唯物論は、社会的存在が社会的意識を決定し、社会的意識は社会的存在に対して反作用をもつと考える。社会的存在は、社会の物質的生活条件をさすが、その主なものは物質の生産形態である。

社会的意識は政治・法律・道徳・芸術・哲学などの観点をさすが、それは社会的存在に対して能動的に作用する。一定の条件のもとにあっては意識が主な決定的働きをする。史的唯物論は、人類社会の歴史的發展が、それ自身の固有の客観的法則をもっていると考える。

それは、社会の基本的矛盾、すなわち社会内部の生産力と生産関係の矛盾の運動、経済的土台と上部構造の矛盾の運動によって変化、発展するものである。

階級社会において、この種の矛盾は激烈な階級斗争となつてあらわれるものであり、階級斗争は階級社会を発展させる原動力である。

これに対して、階級斗争の歴史を認めないで歴史を解釈するのが史的観念論である。史的観念論は、社会の歴史が精神の力によって推移するものであると考え、人間の思想的動機、英雄個人の意志、あるいはある種の超自然的神秘的力を用いて、社会の歴史的發展を解釈してきた。

史的唯物論以前の歴史学説は、せいぜい人々の歴史的

活動の思想的動機を考察したにとどまり、その動機がなによりによって呼び起こされたかを研究せず、社会関係の体系的発展の客観的合法則性を把握せず、これらの関係の根源が物質的生産の発展の程度のうちにあることを見たとらえなかった。過去の歴史学説は、ほかならぬ人民大衆の活動を考えに入れていなかった。

これに対して史的唯物論は、大衆の社会的生活条件とこれらの条件の変化とを自然史的正確さで研究することを可能にしたのである。

すべての搾取階級は、いずれもあらゆる手段を講じて、人民大衆を役し麻痺させるために史的観念論を利用してきた。

かれらは、その搾取という特権を擁護するために、物質的生産の意義をひくめ、歴史における人民大衆の働きを抹殺して、階級斗争に反対し、搾取制度が恒久的なものであると言いつらしてきた。

マルクス主義以前に史的観念論が社会的歴史理論において支配的地位を占めてきたのは、そのためである。

古い唯物論の歴史観もまた観念論的であった。ただマルクス主義の史的唯物論だけが、人類社会の歴史的發展の法則に関するまったく正確な科学である。

マルクス主義の史的唯物論は、科学的思想のなかの最

大の成果であり、プロレタリア階級の政党の綱領、政策、戦術などを定める場合の理論的基礎にしなければならぬ。そして、社会発展の科学的理論と社会認識、社会改造の科学的方法によって、プロレタリアートと広範な革命的人民を武装させプロレタリアートの勝利を推し進める革命斗争の強大な思想的武器としなければならぬ。

プロレタリア階級の世界観・方法論である弁証法的唯物論、史的唯物論を具体的実践と結びつけて学習し、プロレタリアート解放の思想的武器としよう！

三 マルクス主義政治経済学を学ぼう！

プロレタリア階級の政治経済学は、マルクスとエンゲルスによって創りあげられたものである。マルクスとエンゲルスは、弁証法的唯物論で人類の歴史の発展を研究し、さらに生産関係は人々のあらゆる社会関係のなかでもっとも根本的で、もっとも本質的な関係であることを明らかにした。

生産関係の発展、変化は人々の意志にかかわらず変化する自然史の過程としてあらわれる。マルクスとエンゲルスが政治経済学を科学を基礎として打ち立てたことにより、政治経済学の偉大な革命的変革が実現した。

マルクスとエンゲルスは、当時の革命斗争からくる要求にこたえ、資本主義社会の経済機構を重点的に分析した。

彼らは、古典派経済学の科学的要素を批判的に継承し、労働価値学説を全面的に論証し、発展させてこれを基礎として剰余価値学説を創りあげた。

資本および剰余価値に対する全面的な分析をつうじ、資本主義的搾取の本質と、ブルジョア階級とプロレタリア階級の間の階級対立の経済的基礎を深く掘り下げて暴露し、資本主義の生成・発展・消滅の法則を白日のもとにさらし、プロレタリア革命とプロレタリア階級独裁の歴史の必然性を論証した。さらに、資本主義の墓掘り人であり、新たな社会の創造者としてのプロレタリア階級の歴史的使命を明らかにした。

マルクスとエンゲルスは、資本主義以前の各種の生産関係の基本的特徴を論証し、さらに、資本主義から共産主義へ到る過渡期と共産主義社会という二つの歴史的段階についての理論を科学的に制定した。

帝国主義時代になると、レーニンは、帝国主義について科学的にその本質と基本的特徴を明らかにした。帝国主義は腐朽した死滅しつつある資本主義であり、プロレタリア革命の前夜であることを指摘し、さらに、プロレ

タリア革命とソ連の社会主義建設の総括し、社会主義革命と社会主義建設についての基礎理論を提起し、これによってプロレタリア階級の政治経済学を新たな段階へと引きあげたのである。

毛沢東は中国の新民主主義革命および社会主義革命、社会主義建設という偉大な斗争を指導する中で、マルクス・レーニン主義の普遍的真理と中国革命の具体的実践とを結びつけ、系統だった理論、方針そして政策を提起し、プロレタリア階級の政治経済学を豊富なものとした。

とりわけ、社会主義革命と社会主義建設の実験的経験にものとすき、社会主義的生産様式の本質と運動法則に対して深く掘りさげた分析と論証を行ない、社会主義は依然として階級と階級矛盾・階級斗争が存在している社会であるとして明確にし、社会主義社会の発展を支配している基本矛盾をも明らかにした。毛沢東は、社会主義社会の矛盾、階級と階級斗争を基礎として社会主義の基本路線を提起し、プロレタリア文化大革命を指導して、いかにしてプロレタリア階級独裁を打ちかため、社会主義を建設するののかという問題についての解決方法を提起したのである。

プロレタリア階級の政治経済学は、マルクス主義を構成している重要な一部分である。この科学が重要である

というのは、それが社会経済の発展法則の科学的理論でプロレタリア階級と勤労人民の頭脳を武装し、彼らの革命の実践を指導し、事物の本質を洞察したり、変化の進行過程を見透す能力をもたせることができるからである。マルクス主義の政治経済学は、プロレタリア階級とその政党が、資本主義をくつがえし、社会主義そして共産主義を建設する思想上の武器である。

マルクス主義者は、人類の生産活動がもっとも基本的な実践活動であり、他のすべての活動を決定するものであると考える。だが、ブルジョア階級の多くの思想的代弁者どもは全てこの見解を認めようとしない。彼らは、人類社会は、神の意志によって発展したという間違った理論を鼓吹するか、さもなければ、英雄が歴史をつくったという空論をふりまいている。

人間はまず何よりも衣・食・住を得るために生産活動をしなければならぬという事実を、これらの代弁者どもは抹殺している。

直接的な物質的生活手段の生産が人類社会発展の基礎を構成するのであり、勤労人民の生産活動がなければ、人類は生存できず社会も発展できないのである。

まさにマルクスが指摘したように「生産をおこなうために、人類は一定のつながりと関係をもった。これらの社会的つながりと社会関係の範囲内において、はじめて人の自然に対する関係が生まれ、生産することができるようになった」のである。

生産過程において人間がつくりあげたこの関係を生産関係といふ階級社会においては、この関係は階級関係として現われる。

生産しようとする、人と人との間、人と自然界との間にも関係が生まれる。人間は自然を征服し改造していかねばならない。

人間が自然を征服、改造する能力を生産力といい、人と物という二つの要素によって構成される。

生産関係と生産力が社会的生産の二つの側面を構成する。歴史発展の全体をつうじて、生産力は一般的に主要な決定的役割を果たすものとして現われ、いかなる生産関係の変革も、すべて生産力のある一定の発展によってもたらされるのである。

生産力の発展は、それに照応しなくなった古い生産関係を打破し、生産力の発展に照応できる新しい生産関係をそれによってかわらせることを要求する。

古い生産関係の変革、新しい生産関係の樹立と強化は

すでに、社会主義的共有制が資本主義的私有制にとってかわることが必要になっている。

しかし、ブルジョア階級が反動的な国家機構を掌握しており、その上資本主義の経済的土台を維持するために利用している。

プロレタリア階級は、何よりもまずブルジョア階級の国家機構を打ちやぶらなければ、資本主義制度を消滅することは不可能である。

修正主義者は「資本主義は社会主義に平和的に移行できる」といっているが、これは全くプロレタリア階級と人民をあざむくウソである。

社会主義社会においては、上部構造が経済的土台と照応している側面が基本的なものである。しかし、ブルジョア階級とそのイデオロギーの存在、国家機構における官僚主義的作風の存在、国家制度のいくつかの点での欠陥の存在などがあるときには、社会主義経済の土台の強化発展に対して阻害する役割を果たすものである。

社会主義の上部構造を社会主義経済の土台に立派に奉仕させるには、上部構造領域での斗争にも力を注がなければならぬ。

社会主義制度は、資本主義制度に必然的にとってかわらなければならない、プロレタリア階級独裁はブルジョア

つねに革命斗争によって実現できるのであるから、上部構造と経済的土台との関係からも考察しなければならない。

上部構造とは、国家権力・軍隊・法律などの政治制度とこれに照応する哲学・文学・芸術などのイデオロギーのことである。

上部構造と経済的土台との矛盾においては、経済的土台が一般的に主要な決定的な役割をになう。古い経済的土台がくずれると、この土台のうえに築かれた上部構造も不可避免的にそれにつれて崩壊するが、その崩壊は速いものもあれば遅いものもある。

反動的な国家機関が変革されたのち、くつがえされ没落した反動的階級は、古い経済的土台の消滅につれて自発的に歴史の舞台から退場することはない。

かれらは、政治領域・思想文化領域においてなお先進的階級と長期に渡る生死をかけた斗争をする。とりわけ、古いイデオロギーは長期間存在しつづける。

上部構造は経済的土台によって決定されるものであるが、それが一度築かれたのちは、経済的土台に対して巨大な反作用をもたらし。

資本主義社会では、生産の社会化と生産手段の私的占有制との間の矛盾が先鋭化するにつれて、客観的には、

階級独裁にとってかわらなければならないという革命的で科学的な結論は、マルクス主義の金字塔である。

マルクス主義政治経済学は、マルクス主義哲学・科学的共産主義の理論と一体となって、プロレタリア階級の党を建設し、その党が基本路線を制定する際の理論的基礎に据えなければならない。

マルクス主義の理論的基礎のうえに、また資本主義社会という条件のもとで、プロレタリア革命を指導するプロレタリア階級の党は、プロレタリア階級のために革命的暴力で政治権力を奪取するという基本的政治路線を制定し、プロレタリア階級がブルジョア階級とすべての搾取階級を徹底的にくつがえし、プロレタリア階級独裁をもってブルジョア階級独裁にとってかわらせ、社会主義をもって資本主義に打ち勝ち、かつ共産主義社会を最終的に実現するために斗争するよう指導しなければならない。

そして、社会主義社会においてもマルクス主義経済学は、依然としてプロレタリア階級の党の基本路線を制定するうえでも理論的基礎に据えなければならない。

「社会主義社会は、相当に長い歴史的段階である。この歴史的段階においては、終始、階級と階級矛盾・階級斗争が存在し、社会主義と資本主義との二つの道の斗争

が存在し、資本主義復活の危険性が存在し、帝国主義と社会帝国主義による転覆と侵略の脅威が存在する。これらの矛盾は、ただプロレタリア階級独裁の下での継続革命の理論と実践によってのみ解決することができるとして、毛沢東はのべている。

マルクス主義政治経済学は、すなわち、弁証法的唯物論および史的唯物論の証明と運用そのものであることに留意しなければならない。

弁証法的唯物論と史的唯物論の世界観・方法論を把握し、それを運用して資本主義社会の経済的運動の法則を観察し分析してこそ、はじめて資本主義は必ず滅亡し、社会主義が勝利するという歴史的必然性を理解することが可能となるのである。

また、これを運用して、社会主義社会の経済的運動の法則を観察し分析して、はじめて社会主義社会の階級斗争と路線斗争の長期性・複雑性を理解でき、社会主義社会が、発展して共産主義社会に到達することは人間の意志では変えることのできない歴史的なすう勢であることと理解することが可能になるのである。

このようにして、我々の思想上・政治上の確信は深まり、犠牲を恐れることなく、万難を排して、共産主義社会の実現という事業を推し進めなければならないのである。

これらの対立がすなわち相争う経済的利害をもつ諸階級が自己と社会とを無益な斗争のうちに消耗させないためには、この衝突を緩和し、これを秩序の枠内にたもつべき、外見上、社会の上に立つ権力が必要となった。そして社会から生れながら、しかも社会の上に立ち、社会から自らをますます疎外してゆくこの権力が国家である。国家は階級対立の非和解性の産物であり、その現われであること、国家は、階級対立が客観的に和解されえなくなっているところに、その時にその限りで発生すること。逆に国家の存在は階級対立が和解されえないものであることを証明している。

この国家についての根本的な点について、マルクス主義の歪曲が存在している。ブルジョアイデオロギーは、国家が階級対立と階級斗争のあるところだけに存在することを歴史的事実によって承認を余儀なくするが、「国家は諸階級の和解の機関である」として歪曲し、抑圧者を打倒するための一定の斗争手段と斗争方法とを被抑圧階級から奪い取るものである。

他方、マルクス主義のカウツキー主義的歪曲をなす日本共産党などは、はるかに巧妙にマルクス主義の修正を行なっている。

彼らは、国家が階級支配の機関であることも、階級対

る。

まさに、マルクス・レーニン主義の哲学・政治経済学・科学的共産主義の理論なしには革命運動の勝利は保証されないものである。

日和見主義の説教と実践活動のもっとも狭い形態への心酔とが抱きあっている時代には、マルクス・レーニン主義に固く立脚することを我々は何度でも呼びかけるものである。

四 マルクス主義の国家学説について

① 階級社会と国家

国家の歴史的役割とその意義についてのマルクス主義の根本思想は、エンゲルスの歴史的分析の総括において次のように明瞭に表現されている。

「国家はけっして外部から社会におしつけられた権力ではない。同様に、それはヘーゲルの主張するように『人倫的理念の現実性』でも『理性の形象および現実性』でもない。それは、むしろ特定の発展段階における社会の産物である。それは、この社会が自己自身との解決しがたい矛盾にまき込まれ、自ら払いのける力のない和解

立が和解できないことも理論的には否定しない。しかし次の点を看過するかいつわっている。国家が階級対立の非和解性の産物であり、国家が社会の上に立ち、社会から自らをますます疎外してゆく権力であるならば、あきらかに、被支配階級の解放は暴力革命なしには不可能であり、さらに支配階級によってつくりだされ疎外を体現している国家権力の暴力装置を廃絶することは不可能である。

常備軍と警察とは国家権力の暴力行使の主要な道具である。どんな革命も国家権力の暴力装置を破壊することによってなりたつものであったのである。

「社会の上に立つ権力」を維持するために、国家は租税と国債とを必要とし、これを実施する。国家は階級対立を抑制しておく必要から生れたものであるから、それは通常、経済的に支配する階級の国家である。そしてこの階級は、国家を媒介として政治的にも支配する階級となり、被抑圧階級を抑圧し搾取するための新しい手段を獲得する。

階級斗争の形勢の変化や自らの要求に基づいて、支配階級は異なる政治組織あるいは政権の構成形態をとるのであるが、もちろんどのような形をとろうとも、それらは全て支配階級の独裁である。

政治形体と国家形体の両者を混同することは許されない。政治形体は、政權の構成形態の問題をさし、一定の社会的階級が敵と闘い自らを守るための政權機關をどのような形態で組織するかということをしてさしている。国家形体は、社会の各々の階級が国家の中で占める地位である。

政治形体と国家形体に関する問題は、搾取階級国家の本質を識別し、暴露し、ブルジョアジーや修正主義者の国家論を批判する上できわめて重要な位置をしめるものであるといえる。

国家は恒久的なものではなく、階級の消滅にともなうて、国家もまた消滅をまぬがれない。しかしながら、一切の反動的支配階級は、いずれも自ら進んで歴史の舞台を退いたり、政權をゆすり渡すようなことはありえない。従って、プロレタリアート、被抑圧人民を解放するためには、かならず暴力革命を行ない、搾取階級の掌中にある国家機關を徹底的に打ち砕き掌握して、プロレタリア階級の独裁に変えなければならない。

プロレタリア階級独裁は、人類史上、最高の新しい型の国家であるが、このプロレタリア階級独裁によってのみ、徹底的に階級を消滅させ、共産主義社会に入り、はじめて国家は自ら消滅することができるのである。しか

② 資本主義から共産主義への移行

資本主義社会と共産主義社会との間には、前者の後者への革命的転化の時期があり、この時期に照応して政治上の過渡期がある。この時期の國家はプロレタリアートの革命的独裁以外にありえない。

資本主義社会がもつとも有利な条件のもとで発展する場合、この社会には民主共和制という形の民主主義がある。この民主主義はつねに、資本主義的搾取でしめつけられているので、本質的には、つねにブルジョア階級のための民主主義にとどまっております。資本主義社会の自由は、つねに、古代ギリシャの諸共和国における奴隷所有者の自由と大差のないものである。

近代の賃金奴隷たるプロレタリアートは、資本主義的搾取の諸条件のため欠乏と貧困にいつもおしひしがれているので、プロレタリアートにとっては民主主義も政治も無縁なところですからめられているのである。

とるにたらず少数者のための民主主義、ブルジョア階級のための民主主義、これが資本主義社会の民主主義である。

マルクスはコミューンの経験を分析してつぎのように述べている。

被抑圧者は、数年に一度、抑圧階級のどの代表者が議

じ、社会主義という歴史的段階にあっては、毛沢東と中国共産党が明らかにしているように、いまだ帝国主義、社会帝国主義が存在し、国内のブルジョア分子、反動階級が存在しているので国家は自ら消滅することはありえない。

したがって、プロレタリア階級独裁を強化し、社会主義建設を深め、全世界で斗われているプロレタリア革命運動を支持・支援し、世界革命の勝利のために斗わなければならない。

国家の問題は、もともと全ての政治問題や政治論争の焦点であった。ブルジョア思想家・労働運動におけるすべての日和見主義者が国家問題について作り出した各種の誤った理論は、いずれもブルジョア階級の國家の反動的本質を暴露し、抹殺し、プロレタリア階級独裁を攻撃するものである。

ソ連共産党の宣伝する「全人民の國家」というものは、まさにソ連邦に存在しているブルジョア分子・官僚主義反動支配をおおひ隠すものであり、マルクス主義の國家学説に対する修正である。

「全人民の國家」論は、社会主義という歴史的段階におけるプロレタリア階級独裁をくつがえし資本主義復活をおおひかくすものなのである。

会で彼らを代表し、かつ階級にしろかを決定することが許されると。

資本主義社会から共産主義社会への発展は、プロレタリアートの独裁を通じてすすむのであって、それ以外のすすみかたはありえない。

なぜなら、搾取階級であるブルジョアジーの反抗をうちかくすことは、プロレタリアート以外のだれにもできないし、また、他のどんな方法によってもできないからである。

プロレタリアートの独裁、すなわち抑圧者を抑圧するために被抑圧者の前衛を支配階級として組織することは、たんに民主主義の拡大をもたすだけではない。

プロレタリアートの独裁は、民主主義をおおろくほど拡張し、この民主主義は、はじめて「富者のための民主主義」ではなしに、人民のための民主主義となるが、これと同時に、抑圧者・搾取者・資本家に対して一連の自由の除外例をもうける。

人類を賃金奴隷制から解放するためには、プロレタリアートは彼らを抑圧しなければならず、彼らの反抗を力でもって打ち砕かなければならない。抑圧のあるところ暴力のあるところには、自由がなく民主主義がないことは明らかである。

資本家の反抗がもはや終局的に打ち砕かれ、資本家が消滅し、社会的生産手段に対する関係からみて社会の成員の間に差別がなくなる、即ち、階級がなくなる共産主義社会になってはじめて、その時「国家は消滅し、自由について語りうるようになる。」

この時にはじめて、なんの除外例もなく民主主義が可能となり、実現されるであろう。そして、民主主義はつぎの単純な事情のために死滅し始るであろう。

すなわち、資本主義的搾取の数限りない恐怖・野蠻・不合理・醜悪さから解放され、資本主義的奴隷制から解放された人間は、これまでの歴史でくりかえされてきた共同生活の根本規則をまもることに、暴力がなくなるとも、強制がなくなるとも、隷属関係がなくなるとも、国家とよばれる特殊の強制装置がなくなるとも、これらの規則をまもることに徐々に慣れていくだろうということである。

「国家は死滅する」という表現は、はなはだ選択の妙を得ている。この表現は、過程の漸次性をも、その自然成長性をもしめしているからである。

共産主義だけが国家を完全に不必要にする。なぜなら、抑圧すべき対象がないからである。

プロレタリア革命 準備号

労働者共産主義委員会
神奈川県委員会発行

TEL 045 (774) 7067